

環境省自然環境局野生生物課 希少種保全推進室 編

環境省レッドリスト 2018 補遺資料

Addendum: Red List 2018 on Ministry of the Environment, Government of Japan.

はじめに

「環境省レッドリスト 2018 補遺資料」は、平成 30 年 5 月に公表されたレッドリスト 2018 において新規に掲載された種(亜種、変種等を含む、以下同じ)及びカテゴリーが変更された種等を対象に、それらの評価理由や生息状況等を簡潔に解説したものです。

すでに刊行されている各分類群のレッドデータブック 2014 及び平成 29 年 10 月に公表した「環境省レッドリスト 2017 補遺資料」と合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望まれます。

レッドリスト 2018 の詳細については、以下の web ページを参照してください。

<<http://www.env.go.jp/press/105504.html>>

平成 27 年 9 月に公表したレッドリスト 2015 より、「第 4 次レッドリストの随時見直し」を実施しています。随時見直しにおける評価対象は、「近年の情報から減少が確認され、早急なカテゴリー変更が必要となる種」、あるいは、「新種記載等の分類学的な最新知見に基づき新種の追加や既存掲載種の分離・統合が生じ、早急に評価が必要と判断された種」等です。

また、レッドリスト 2017 より、全分類群を対象とし、定量的要件を用いた絶滅危惧カテゴリーの評価を併せて開始しました。そのため、第 4 次レッドリストまで定量的要件により絶滅危惧カテゴリーを評価 (CR+EN, VU) していた分類群(貝類、その他無脊椎動物、蘚苔類、藻類、地衣類、菌類)については、随時見直しにより評価した種に限って定量的要件を用いた評価 (CR, EN, VU) が行われており、両評価結果が混在した状態にあります。なお、随時見直しによる評価が実施されない他の掲載種についても、平成 32 年度から開始予定の「レッドリスト全体見直し」において定量的要件を用いて再評価される見込みです。

解説内容

環境省レッドリスト 2018 に新たに掲載された 45 種、カテゴリーが変更された 18 種、レッドリストから削

除された 4 種について、以下の内容を簡潔に解説しました。哺乳類、蘚苔類、藻類、菌類については、レッドリスト 2018 において評価した種はありませんでした。

なお、カテゴリー変更を行った種については、基礎情報がレッドデータブック 2014 に掲載されていることから内容の変更等が生じない場合には、基本的には基礎情報を割愛し(貝類の NT, DD 種他を除く)、リストから削除した種については、削除理由のみを掲載しています。

【掲載項目】

- カテゴリー区分(新旧)
- 分類群名(目名、科名等)
- 標準和名
- 学名、命名者名、命名年
- カテゴリー判定基準
- 日本における固有性
- 基礎情報(評価種の形態、生態、分布等の基本的な情報等を記載)
- 随時見直しの評価理由(随時見直しにより評価を行った理由及び種の現状等を記載)
- 存続を脅かす要因
- 参考文献
- 執筆者、協力者(所属)

執筆

執筆はつぎの方々、団体にお願ひし、執筆者名、協力者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

| | | |
|------|-------|-----------|
| 川上和人 | 荒谷邦雄 | 富川 光 |
| 西海 功 | 小松 貴 | 大高明史 |
| 戸田 守 | 矢後勝也 | 日本植物分類学会 |
| 松井正文 | 亀田勇一 | |
| 島田知彦 | 和田慎一郎 | 【協力者】 |
| 福山欣司 | 久保弘文 | 矢野重文 |
| 小林頼太 | 福田 宏 | 河辺訓受 |
| 清水孝昭 | 早瀬善正 | 大八木昭 |
| 中島 淳 | 近藤高貴 | (敬称略、掲載順) |

○レッドリスト 2018 検討体制

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会の下に分類群毎に分科会を置いて検討を行った。検討員については以下のとおり。(50 音順、◎は座長、所属は平成 29 年度時点)

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 検討員

石井 信夫 東京女子大学現代教養学部 教授
◎石井 実 大阪府立大学 理事
尾崎 清明 山階鳥類研究所 副所長
角野 康郎 神戸大学大学院理学研究科 教授
近藤 高貴 大阪教育大学 名誉教授
田中 次郎 東京海洋大学 名誉教授
布村 昇 金沢大学環日本海域環境研究センター 連携研究員
細谷 和海 近畿大学大学院農学研究科 教授
松井 正文 京都大学 名誉教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 哺乳類分科会

◎石井 信夫 東京女子大学現代教養学部 教授
押田 龍夫 帯広畜産大学環境農学研究部門環境生態学分野 教授
佐野 明 三重県伊賀農林事務所森林・林業室 副参事兼林業振興課長
中川 元 元斜里町立知床博物館 館長
横畑 泰志 富山大学大学院理工学研究部 教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 鳥類分科会

植田 睦之 バードリサーチ 理事長
◎尾崎 清明 山階鳥類研究所 副所長
金井 裕 日本野鳥の会 参与
玉田 克巳 北海道立総合研究機構環境・地質研究本部環境科学研究センター 主査
永田 尚志 新潟大学朱鷺・自然再生学研究センター 教授
新妻 靖章 名城大学農学部 教授
西海 功 国立科学博物館動物研究部 研究主幹

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 爬虫類・両生類分科会

太田 英利 兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授
竹中 践 東海大学生物学部 教授
戸田 守 琉球大学熱帯生物圏研究センター 准教授
福山 欣司 慶應義塾大学経済学部 教授
◎松井 正文 京都大学名誉教授

◆絶滅のおそれのある野生生物種の選定・評価検討会 汽水・淡水魚類分科会

- 乾 隆帝 山口大学大学院創成科学研究科 助教（特命）
小泉 逸郎 北海道大学地球環境科学研究科 准教授
小早川 みどり 日本魚類学会 会員
清水 孝昭 愛媛県農林水産研究所水産研究センター栽培資源研究所 担当係長
鈴木 寿之 兵庫県立川西緑台高等学校 教諭
立原 一憲 琉球大学理学部海洋自然科学科 准教授
◎細谷 和海 近畿大学大学院農学研究科 教授
前田 健 沖縄科学技術大学院大学 スタッフサイエンティスト
前畑 政善 神戸学院大学人文学部 教授
渡辺 勝敏 京都大学大学院理学研究科 准教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 昆虫類分科会

- 荒谷 邦雄 九州大学大学院比較社会文化研究院 教授
◎石井 実 大阪府立大学 理事
大原 賢二 元徳島県立博物館 館長
苅部 治紀 神奈川県立生命の星・地球博物館 主任学芸員
岸田 泰則 日本蛾類学会 会長
北野 忠 東海大学 教養学部人間環境学科 教授
神保 宇嗣 国立科学博物館動物研究部 研究主幹
多田内 修 九州大学 名誉教授
林 正美 埼玉大学 名誉教授
丸山 宗利 九州大学総合研究博物館 助教
矢後 勝也 東京大学総合研究博物館 助教

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 貝類分科会

- 岩崎 敬二 奈良大学教養部 教授
亀田 勇一 国立科学博物館分子生物多様性研究資料センター 特定非常勤研究員
木村 妙子 三重大学大学院生物資源学研究科 准教授
久保 弘文 沖縄県水産海洋技術センター 班長 兼 革新支援専門員
◎近藤 高貴 大阪教育大学 名誉教授
早瀬 善正 株式会社東海アクアノーツ 主査研究員
福田 宏 岡山大学大学院環境生命科学研究科 准教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 その他無脊椎動物分科会

- 石井 清 昭和大学富士吉田教育部 客員教授
大高 明史 弘前大学教育学部理科教育講座 教授
駒井 智幸 千葉県立中央博物館 主任上席研究員

佐藤 英文 東京家政大学家政学部 教授
 島野 智之 法政大学 自然科学センター 教授
 谷川 明男 東京大学大学院農学生命科学研究科 農学特定支援員
 鶴崎 展巨 鳥取大学農学部生命環境農学科 教授
 富川 光 広島大学大学院教育学研究科 准教授
 並河 洋 国立科学博物館動物研究部 研究主幹
 成瀬 貫 琉球大学熱帯生物圏研究センター西表研究施設 准教授
 ◎布村 昇 金沢大学環日本海域環境研究センター 連携研究員

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 維管束植物分科会

伊藤 元己 東京大学大学院総合文化研究科 教授
 海老原 淳 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
 勝山 輝男 神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸員
 ◎角野 康郎 神戸大学大学院理学研究科 教授
 黒沢 高秀 福島大学共生システム理工学類 教授
 高橋 英樹 北海道大学総合博物館 特任教授
 高宮 正之 熊本大学大学院先端科学研究部 教授
 藤井 伸二 人間環境大学人間環境学部 准教授
 矢原 徹一 九州大学大学院理学研究院 教授
 横田 昌嗣 琉球大学理学部海洋自然科学科 教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 蘚苔類・藻類・地衣類・菌類分科会

蘚苔類

片桐 知之 公益財団法人服部植物研究所 所長
 長谷川 二郎 南九州大学教養教職センター 教授
 樋口 正信 国立科学博物館植物研究部 部長
 古木 達郎 千葉県立中央博物館 自然誌・歴史研究部長
 山口 富美夫 広島大学大学院理学研究科 教授

藻類

神谷 充伸 福井県立大学海洋生物資源学部 教授
 坂山 英俊 神戸大学大学院理学研究科 准教授
 ◎田中 次郎 東京海洋大学 名誉教授
 寺田 竜太 鹿児島大学大学院連合農学研究科 教授

地衣類

井上 正鉄 秋田大学 名誉教授
 大村 嘉人 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
 柏谷 博之 国立科学博物館 名誉研究員

宮脇 博巳 佐賀大学教育学部 教授
吉田 考造 元埼玉県立自然の博物館 学芸員

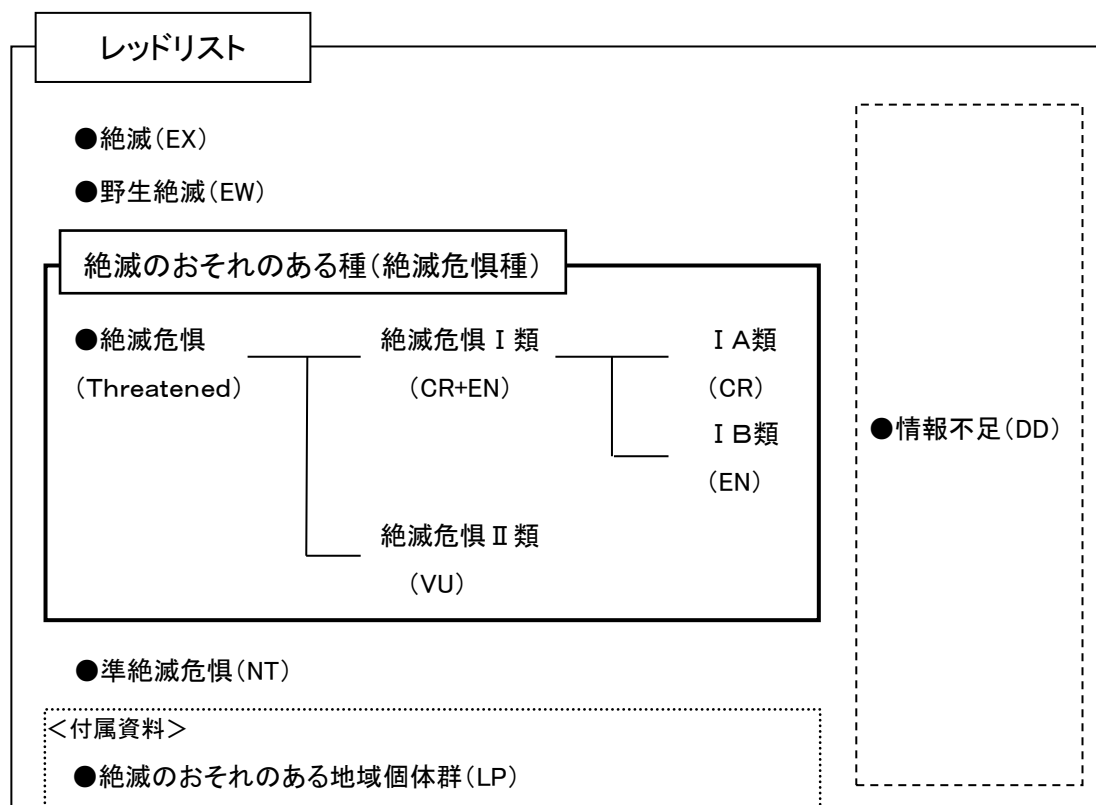
菌類

糟谷 大河 千葉科学大学危機管理学部 講師
服部 力 森林総合研究所きのこ・森林微生物研究領域森林病理研究室 室長
吹春 俊光 千葉県立中央博物館 植物学研究科長
保坂 健太郎 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
細矢 剛 国立科学博物館植物研究部 菌類・藻類研究グループ長

環境省レッドリストカテゴリーと判定基準（2018）

【カテゴリー（ランク）】

今回のレッドリスト見直しに際して用いたカテゴリーは下記のとおりであり、第4次レッドリスト（2012、2013）やレッドリスト2015及びレッドリスト2017で使用されているカテゴリーと同一である。



【判定基準】

2001年にIUCN（国際自然保護連合）が新たな数値基準を採用した「IUCNレッドリストカテゴリーと基準」*1を発行したことを受けて、第3次レッドリスト作成時にカテゴリーの判定基準の一部変更を行い、第4次レッドリストやレッドリスト2015及びレッドリスト2017作成時も同様の判定基準を用いた。今回の見直しにおいても第4次レッドリストの判定基準を踏襲して、各対象種の評価を実施した。判定基準の詳細については、次ページ以降に示すとおりである。

また、数値基準による評価が可能となるようなデータが得られない種も多いことから、第4次リストで用いてきたものと同様に、「定性的要件」と「定量的要件(数値基準)」を併用するが、原則として、随時見直しを行う種については、「定量的要件」を適用することとした。なお、「定性的要件」と「定量的要件」は、必ずしも厳密な対応関係にあるわけではないが、現時点では併用が最善との結論に至ったものである。

*1 IUCN (2001) IUCN Red List Categories and Criteria: Version 3.1. IUCN Species Survival Commission. Gland, Switzerland and Cambridge, U.K.

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

| カテゴリー及び基本概念 | | 定性的要件 | 定量的要件 |
|--|--|---|---|
| 絶滅 Extinct (EX) 我が国ではすでに絶滅したと 考えられる種(注1.以下同じ) | | 過去に我が国に生息したことが確認さ れており、飼育・栽培下を含め、我が国 ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、次のいずれかの事項を 満たすもの ①信頼できる調査や記録により、すで に野生で絶滅したことが確認されて いる。 ②信頼できる複数の調査によっても、 生息が確認できなかった。 ③過去長期間にわたり(例えば50年間 前後)、信頼できる生息の情報が得 られていない。 | |
| 野生絶滅 Extinct in the Wild (EW) 飼育・栽培下、あるいは自然分 布域の明らかに外側で野生化 した状態でのみ存続している 種 | | 過去に我が国に生息したことが確認さ れており、飼育・栽培下、あるいは自然 分布域の明らかに外側で野生化した 状態では存続しているが、我が国にお いて本来の自然の生息地ではすでに 絶滅したと考えられる種 (具体的要件は「絶滅」と同じ) | |
| 絶滅危惧 T H R E A T E N E D | 絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕して いる種 現在の状態をもたらした 圧迫要因が引き続き作 用する場合、野生での存 続が困難なもの。 | 次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①既知のすべての個体群で、危機的水 準にまで減少している。 ②既知のすべての生息地で、生息条件 が著しく悪化している。 ③既知のすべての個体群がその再生 産能力を上回る捕獲・採取圧にさら されている。 ④ほとんどの分布域に交雑のおそれ ある別種が侵入している。 【情報量が少ないもの】 ⑤それほど遠くない過去(30年～50年) の生息記録以後確認情報がなく、そ の後信頼すべき調査が行われてい ないため、絶滅したかどうかの判断 が困難なもの。 | 絶滅危惧 I A 類 Critically Endangered (CR) ごく近い将来に おける野生で の絶滅の危険 性が極めて高 いもの。 |
| | | | A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる 場合。 1. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期 間(注2.以下同じ)を通じて、90%以上の減少 があつたと推定され、その原因がなくなつて おり、且つ理解されており、且つ明らかに可 逆的である。 2. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期 間を通じて、80%以上の減少があつたと推定 され、その原因がなくなっていない、理解され ていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長期間 を通じて、80%以上の減少があると予測され る。 4. 過去と未来の両方を含む10年間もしくは3世 代のどちらか長い期間において80%以上の 減少があると推定され、その原因がなくなつ ていない、理解されていない、あるいは可逆的 でない。 B. 出現範囲が100km ² 未満もしくは生息地面積が 10km ² 未満であると推定されるほか、次のうち2 つ以上の兆候が見られる場合。 1. 生息地が過度に分断されているか、ただ1カ 所の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継 続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極 度の減少が見られる。 |

(注1)種: 動物では種及び亜種、植物では種、亜種及び変種(一部に品種を含む)を示す。

(注2)過去10年間もしくは3世代: 1世代が短く3世代に要する期間が10年未満のものは年数を、1世代が長く3世代に要する期間が10年を超えるものは世代数を採用する。

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

| カテゴリー及び基本概念 | 定性的要件 | 定量的要件 |
|---|-------|---|
| <p>絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">絶滅危惧 T H R E A T E N E D</p> | | <p>絶滅危惧 I A 類 Critically Endangered (CR)</p> <p>ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が250未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 3年間もしくは1世代のどちらか長い期間に25%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 50以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中に90%以上の成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 成熟個体数が50未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、10年間、もしくは3世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が50%以上と予測される場合。</p> |
| | | <p>絶滅危惧 I B 類 Endangered (EN)</p> <p>I A類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、70%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、且つ理解されており、且つ明らかに可逆的である。 2. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長期間を通じて、50%以上の減少があると予測される。 4. 過去と未来の両方を含む10年間もしくは3世代のどちらか長い期間において50%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 <p>B. 出現範囲が5,000km²未満もしくは生息地面積が500km²未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生息地が過度に分断されているか、5以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。 |

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

| カテゴリー及び基本概念 | 定性的要件 | 定量的要件 |
|--|---|---|
| <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">絶滅危惧</p> <p>絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p> | | <p>絶滅危惧 I B 類 Endangered (EN)</p> <p>I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が2,500未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 5年間もしくは2世代のどちらか長い期間に20%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 250以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中に95%以上の成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 成熟個体数が250未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、20年間、もしくは5世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が20%以上と予測される場合。</p> |
| <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">T H R E A T E N E D</p> <p>絶滅危惧 II 類 Vulnerable (VU) 絶滅の危険が増大している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの。</p> | <p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ② 大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 ③ 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。 | <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、且つ理解されており、且つ明らかに可逆的である。 2. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長期間を通じて、30%以上の減少があると予測される。 4. 過去と未来の両方を含む10年間もしくは3世代のどちらか長い期間において30%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 <p>B. 出現範囲が20,000km²未満もしくは生息地面積が2,000km²未満であると推定され、また次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生息地が過度に分断されているか、10以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等について、継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。 |

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

| カテゴリー及び基本概念 | | 定性的要件 | 定量的要件 |
|-------------|--|---|---|
| 絶滅危惧 | <p>絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable (VU) 絶滅の危険が増大している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの。</p> | | <p>C. 個体群の成熟個体数が10,000未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10年間もしくは3世代のどちらか長い期間に10%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 1,000以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中にすべての成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 個体群が極めて小さく、成熟個体数が1,000未満と推定されるか、生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている場合。</p> <p>E. 数量解析により、100年間における絶滅の可能性が10%以上と予測される場合。</p> |
| | <p>準絶滅危惧 Near Threatened (NT) 存続基盤が脆弱な種</p> <p>現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの。</p> | <p>次に該当する種</p> <p>生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。</p> <ol style="list-style-type: none"> a) 個体数が減少している。 b) 生息条件が悪化している。 c) 過度の捕獲・採取による圧迫を受けている。 d) 交雑可能な別種が侵入している。 | |
| | <p>情報不足 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種</p> | <p>次に該当する種</p> <p>環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性(具体的には、次のいずれかの要素)を有しているが、生息状況をはじめとして、カテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。</p> <ol style="list-style-type: none"> a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。 b) 生息地が局限されている。 c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。 | |

■ 付属資料

| カテゴリー及び基本概念 | 定性的要件 | 定量的要件 |
|--|---|-------|
| <p>絶滅のおそれのある地域個体群 Threatened Local Population (LP)</p> <p>地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。</p> | <p>次のいずれかに該当する地域個体群</p> <p>①生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。</p> <p>②地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。</p> | |

【鳥 類】

■ 補遺資料掲載種一覧

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリー | |
|-----------|--------|-----------------------------------|--|----------|-----------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| シマハヤブサ | シマハヤブサ | <i>Falco peregrinus furuitii</i> | <i>Falco peregrinus furuitii</i> | DD | EX |
| ウスアカヒゲ | ウスアカヒゲ | <i>Luscinia komadori subrufus</i> | <i>Luscinia komadori subrufus</i> | DD | EX |

EX

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): DD

ハヤブサ目ハヤブサ科

【鳥類】

シマハヤブサ

日本固有亜種

Falco peregrinus furuittii Momiyama, 1927

カテゴリー判定基準: ③

基礎情報

北硫黄島で採集された標本に基づき 1927 年に記載された火山列島固有の亜種(靱山, 1927)。亜種ハヤブサより小型で褐色みが強い(靱山, 1927)。1891 年には硫黄島でも 4、5 つがいのハヤブサの生息が報告されており、これも同亜種と考えられている(Seebohm, 1891)。一方、同じ火山列島の南硫黄島では過去に記録がない(塚本, 1983; 川上ほか, 2008)。戦前は北硫黄島、硫黄島ともに海鳥の大繁殖地となっており、また硫黄島では主にアナドリを捕食すると報告されていることから(Seebohm, 1891)、海鳥に依存して集団を維持していた可能性がある。

北硫黄島では 2000 年以後に繰り返し鳥類調査が行われているが本亜種は記録されておらず、1937 年 8 月の標本が最後の確実な記録となっている(山階鳥類研究所標本データベース <https://decochan.net>)。硫黄島でも戦後に複数回の調査が行われているが、1891 年の報告を最後に本亜種の記録がない。1937 年の記録以来 50 年以上確認例がないことから絶滅していると判定した。

なお、過去のレッドデータブックでは 1932 年 2 月に八丈島で本亜種の標本が採集されたとしていたが(黒沢・金井 2014)、黒沢が標本を再確認したところ本亜種ではなかった。

随時見直しの評価理由

以前は 1956 年 3 月に伊豆諸島鳥島で採集された標本が本亜種とされていたが、2012 年に出版された日本鳥類目録改訂第 7 版においてこの分布記録は削除された。これは、当該標本が若鳥の翼と尾羽、足のみであり、亜種シマハヤブサと判定するには不十分と判断されたためである。これにより本亜種の分布は北硫黄島と硫黄島に限定されることとなったが、これらの地域では戦後の調査で生息が確認されていないため、日本鳥類目録改訂第 7 版では絶滅と判断しており、今回この見解に従い随時見直しを行なった。

存続を脅かす要因 局所分布(61)

参考文献

- 川上和人・鈴木創・千葉勇人・堀越和夫, 2008. 南硫黄島の鳥類相. 小笠原研究, 33:111-127.
 黒沢隆・金井裕, 2014. シマハヤブサ. レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—2 鳥類, p. 236. ぎょうせい, 東京.
 靱山徳太郎, 1927. 日本産新鳥類(1). 東亜鳥学彙報, 1: 1-80.
 日本鳥学会, 2012. 日本鳥類目録改訂第 7 版, 日本鳥学会, 三田, 438pp.
 Seebohm, H., 1891. On the birds of the Volcano Islands. Ibis 6th ser., 3: 189-192.
 塚本洋三, 1983. 南硫黄島の鳥類. 環境庁自然保護局(編), pp. 249-285. 日本野生生物研究センター, 東京.

執筆: 川上和人(森林総合研究所)

ウスアカヒゲ

日本固有亜種

Erithacus komadori subrufus (Kuroda, 1923)

カテゴリー判定基準:③

基礎情報

日本固有亜種(種全体として日本固有種)である。スズメ大の小鳥で、頭上、翼、背面、尾羽は明るい赤褐色、額から顔と喉は黒色、腹と脇は白色で脇に黒斑がある。八重山諸島与那国島で1921年10月に雄1個体が採集されて以来、50年以上確認例がない。Kawaji and Higuchi (1989)は亜種ウスアカヒゲを基亜種アカヒゲの越冬個体で、基亜種アカヒゲのシノニムとしたが、森岡(1990)は額の黒色部の広さからアカヒゲは次の3型に明確に分けられるとして、亜種ウスアカヒゲを独立した亜種とみなした。無額型:亜種ホントウアカヒゲ(沖縄島)、狭額型:基亜種アカヒゲ(トカラ列島、奄美大島)、広額型:亜種ウスアカヒゲのタイプ標本(与那国島の越冬:繁殖地不明)。日本鳥類目録第7版(日本鳥学会, 2012)は森岡(1990)の分類を採用している。小倉(2004)や Seki & Ogura (2007)によって、現在、亜種アカヒゲが先島諸島で越冬することは確認されている。1921年以降、様々な調査が行われているが、タイプ標本の採集記録以外に亜種ウスアカヒゲの確実な記録はない。以上のことから、50年以上確認例がなく、絶滅に相当する。

随時見直しの評価理由

2012年に出版された日本鳥類目録改訂第7版において、本亜種は1921年に採集された与那国島の標本以降の生息記録がなく、50年以上生息記録がないことから絶滅と判断されており、この見解に従い再評価が必要なため随時見直しを行なった。

存続を脅かす要因

局所分布(61)

参考文献

- Kawaji, N. and H. Higuchi, 1989. Distribution and status of the Ryukyu Robin *Erithacus komadori*. 山階鳥類研究所研究報告, 21: 224-233.
 森岡弘之, 1990. トカラ列島の繁殖鳥類とその起源. 国立科博報, (23): 151-166.
 小倉豪, 2004. 基亜種アカヒゲの齢の査定および与那国島捕獲個体の羽衣の特徴について. 日本鳥類標識協会誌, 17 (2) : 58.
 関伸一, 2005. レッドリストの生き物たち 19. ウスアカヒゲ. 森林技術, 756: 32-33.
 Seki, S. and T. Ogura, 2007. Breeding origins of migrant Ryukyu robins (*Erithacus komadori*) inferred from mitochondrial control region. Ornithological Science, 6: 21-27.
 Seki, S., M. Sakanishi, N. Kawaji, and N. Kotaka, 2007. Phylogeography of the Ryukyu robin (*Erithacus komadori*): population subdivision in land-bridge islands in relation to the shift in migratory habit. Molecular Ecology, 16: 101-113.

執筆者: 西海 功(国立科学博物館)

【爬虫類】

■補遺資料掲載種一覧

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリー | |
|-----------|-----------|---|---|----------|--------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| マダラトカゲモドキ | マダラトカゲモドキ | <i>Goniurosaurus kuroiwaie orientalis</i> | <i>Goniurosaurus kuroiwaie orientalis</i> | EN* | CR |
| — | ケラマトカゲモドキ | <i>Goniurosaurus kuroiwaie sengokui</i> | <i>Goniurosaurus kuroiwaie sengokui</i> | — | EN |
| クメジマハイ | 削除 | <i>Sinomicrurus japonicus takarai</i> | 削除 | VU | 削除 |

※一部集団がケラマトカゲモドキとして分離されたため再評価

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): EN(種分離による再評価)

有鱗目トカゲモドキ科

【爬虫類】

マダラトカゲモドキ

日本固有亜種

Goniurosaurus kuroiwae orientalis (Maki, 1930)

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

頭胴長はオスで最大 94 mm に達し、メスでは具体的な公表データはないが、ケラマトカゲモドキよりも大きくなる。胴背面に横帯と縦条成分を併せ持ち、その色が黄土色で赤味を帯びないこと、横帯と横帯の間に淡色の小斑がみられること、虹彩が赤味を帯びることなどで特徴付けられる。沖縄諸島の渡名喜島に固有分布する。主に、常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に生息する。

本亜種が分布する渡名喜島の面積は全体でも 3.46 km² に過ぎず、これまでの調査から、そのなかで本種が生息する地域はどんなに広く見積もっても 2.1 km² を越えないと考えられる。また、実際に個体が確認されている場所はそのなかでも限られており、事実上単一の集団として存続している可能性が高い。加えて、生息地周辺では断続的に土地整備や道路の整備などが行われており、生息個体数も減少していると考えられる。

随時見直しの評価理由

本亜種はこれまで沖縄諸島の複数の島に分布するとされていたが、2017 年 6 月に公表された論文によって分類に変更が加えられ、渡名喜島集団だけで構成される分類群とされた (Honda and Ota, 2017)。これにより、本亜種の潜在的な生息地面積は従来の認識のもとにおけるその 1/10 以下となり、絶滅の危険性に関して早急に見直す必要性が生じた。

存続を脅かす要因 道路建設(24) ダム建設(25) 交通事故(26) 捕獲・狩猟(41) 局所分布(61)

参考文献

Honda, M. and H. Ota, 2017. On the live coloration and partial mitochondrial DNA sequences in the topotypic population of *Goniurosaurus kuroiwae orientalis* (Squamata: Eublepharidae), with description of a new subspecies from Tokashikijima Island, Ryukyu Archipelago, Japan. *Asian Herpetological Research*, 8: 96-107.

執筆: 戸田 守(琉球大学熱帯生物圏研究センター)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): なし(種分離による評価)

有鱗目トカゲモドキ科

【爬虫類】

ケラマトカゲモドキ

日本固有亜種

Goniurosaurus kuroiwae sengokui Honda & Ota, 2017

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

頭胴長はオスで最大 88 mm、メスで 92 mm に達する。胴背面に横帯と縦条成分を併せ持ち、その色は桃色やオレンジ色など変異に富むものの多少なりとも赤味を帯びること、横帯と横帯の間に淡色の小斑がみられること、虹彩が赤味を帯びることなどで特徴付けられる。沖縄諸島の渡嘉敷島と阿嘉島の2島だけに分布する。主に、常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に生息し、メスは6~7月にかけて1度に2卵を産卵する。

本亜種の主要な生息地である渡嘉敷島は全体でも面積 15.29km² であり、そのなかの実際の生息地面積は広く見積もっても 12.6km² ほどである。一方、阿嘉島で個体が確認される範囲は数字にできないほど狭く、カテゴリー判定に影響を与えない。渡嘉敷島ではかつては比較的高い頻度で個体が見つかる場所もあったが、集落や林道沿いをはじめ、そういう場所は近年までに明らかに減少している。

随時見直しの評価理由

2017 年 6 月に、これまでマダラトカゲモドキとされていた渡嘉敷島と阿嘉島の個体群が新亜種ケラマトカゲモドキ *Goniurosaurus kuroiwae sengokui* として記載された (Honda and Ota, 2017)。このケラマトカゲモドキの潜在的な生息地範囲は、分割前のマダラトカゲモドキ全体のそれに比べ 1/2 以下であり、新たな分類学的認識のもとでの危急度の早急な再評価が必要と考えられた。

存続を脅かす要因 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41)

参考文献

Honda, M. and H. Ota, 2017. On the live coloration and partial mitochondrial DNA sequences in the topotypic population of *Goniurosaurus kuroiwae orientalis* (Squamata: Eublepharidae), with description of a new subspecies from Tokashikijima Island, Ryukyu Archipelago, Japan. *Asian Herpetological Research*, 8: 96-107.

戸田守・田中聡, 2017. マダラトカゲモドキ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ -, pp. 184-185. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 戸田 守(琉球大学熱帯生物圏研究センター)

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): VU

有鱗目コブラ科

【爬虫類】

クメジマハイ

日本固有亜種

Sinomicrurus japonicus takarai (Ota, Ito & Lin, 1999)

削除理由

2017年に本亜種は別亜種ハイ *Sinomicrurus japonicus boettgeri* の同物異名(シノニム)であることが報告された(Kaito et al., 2017)。この見解に基づき、レッドリスト 2018 では本亜種を削除した。なお、クメジマハイとされていた個体群はハイに含まれる。

参考文献

Kaito, T., H. Ota, and M. Toda, 2017. The evolutionary history and taxonomic reevaluation of the Japanese coral snake, *Sinomicrurus japonicus* (Serpentes, Elapidae), endemic to the Ryukyu Archipelago, Japan, by use of molecular and morphological analyses. *Journal of Zoological Systematics and Evolutionary Research*, 55(2): 156–166.

日本爬虫両棲類学会, 2017. 日本産爬虫両生類標準和名リスト (2017/12/9 版) . http://herpetology.jp/wamei/index_j.php

【両生類】

■補遺資料掲載種一覧

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリー | |
|-----------|------------|---------------------------|-----------------------------|----------|--------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| — | ミカワサンショウウオ | — | <i>Hynobius mikawaensis</i> | — | CR |
| サドガエル | サドガエル | <i>Glandirana susurra</i> | <i>Glandirana susurra</i> | VU | EN |

ミカワサンショウウオ

Hynobius mikawaensis Matsui, Misawa, Nishikawa & Shimada, 2017

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

止水性小型サンショウウオ類の1種。成体の頭胴長は雌雄とも 50~61mm 程度。背面は一様なオリーブ色だが、頭部前半部と四肢には銀白色の細点を有する。腹面は背面より明るく、オスで喉部分が白色の婚姻色に覆われる以外は一様な色彩。卵嚢は紐形、コイル状で、孵化直前の長さは 217~244mm、幅 11.5~12mm 程度。卵径は 3.1~4.8mm 程度。一腹卵数は 19~56 個で 1 対 2 個の卵嚢に包まれる。分子遺伝学的には同じ止水性のクロサンショウウオ及びホクリクサンショウウオと近縁であり、特に後者とは形態的特徴も似るが、外部形態の比率等の違いがあり、別種レベルの分化が認められる。

愛知県東部(新城市、岡崎市、豊田市)の標高 500~700m 程度の丘陵地に局在する。産卵地はスギ植林地及び針広混交林内の溪流源流部及び溪流沿いの湿地であり、産卵は泥深い湧水中で行われる。繁殖地の周辺の林床にはササが密生する。非繁殖期においては産卵地周辺の林床に生息していると考えられる。現在 11 地点の繁殖が確認されており、卵嚢対数から推定すると、少なくとも 200 個体程度の生息が見込まれる。

随時見直しの評価理由

2017 年 8 月に新種記載発表、記載論文の内容から生息範囲が局限しており、減少傾向も明らかなことから、早急にレッドリストでの評価が必要と考えられたため。具体的に懸念される脅威としては、販売、飼育目的の採集が考えられるほか、生息地である湿地周辺の森林伐採やササ帯の衰退、道路建設や造成に伴う土砂の流入等による生息環境の悪化が考えられる。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

Matsui, M., Y. Misawa, K. Nishikawa, and T. Shimada, 2017. A new species of lentic breeding salamander (Amphibia, Caudata) from central Japan. *Current Herpetology*, 36(2): 116-126.

大竹勝, 2009. サンショウウオの一種, 愛知県環境調査センター (編) 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p. 187. 愛知県, 愛知.

大竹勝・島田知彦, 2016. 両生類, 豊田市生物調査報告書作成委員会 (編) 豊田市生物調査報告書分冊その 3, pp. 187-209. 豊田市環境政策課, 豊田.

執筆者: 松井正文(京都大学名誉教授)・島田知彦(愛知教育大学)

サドガエル

日本固有種

Glandirana susurra (Sekiya, Miura & Ogata, 2012)

カテゴリー判定基準: A-2

基礎情報

本州から九州に自然分布し、北海道にも人為移入され定着しているツチガエルから、近年、形態や鳴き声の違い、遺伝子解析や交配実験から独立種とされたものである。新潟県佐渡島固有種。佐渡島では、中央部に生息するサドガエルと南部および北端に生息するツチガエルの分布はほとんど重複しない。ツチガエルに似るが、皮膚はずっと滑らかで腹面は濃い黄色であり、後肢腹面に暗褐色の斑紋をもつ。鳴嚢をもたず、鳴き声は長く続く。体長はオスが 33~44mm、メスが 38~50mm 程度。遺伝的には新潟市や佐渡島内のツチガエルよりも、関東地方のツチガエルに近縁。韓国や中国のツチガエル属の別種とも遺伝的に離れる。ツチガエルとの人工交配による交雑種はオスばかりで、生殖能力は著しく低い。主に水田やため池などの止水環境に生息。繁殖期は 5 月中旬から 8 月上旬。幼生のまま越冬し翌年に変態して上陸。野外で年内に変態上陸する例は知られない。

現在、佐渡島中央部の国仲平野および周辺の水田地帯とため池に不連続に生息している。国仲平野周辺のため池の多くにはウシガエルなどの外来種が定着しており、こうしたため池における本種の生息確認事例はない。国仲平野で本種が確認できるのは、湿性水田や水田内水路のある水田など、ウシガエルが定着できないような水深の浅い湿地環境が中心である。本種の幼生期間は約 1 年に及ぶ。中干しや稲刈り時の落水、冬期の乾田化など、近代的農法による水管理や圃場整備、管理放棄による植生遷移の進行など、農業活動に伴う水環境の変化は本種の生息状況に大きく影響するとみられる。

随時見直しの評価理由

近年、独立種とされ、分布域が極めて限られており、絶滅の可能性があることから、レッドリスト 2017 において初めて掲載されたが、現地調査により、更に生息状況の悪化が確認されたため再度評価を行った。

存続を脅かす要因

湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 農薬汚染(32) 捕食(外来種による)(52-3) 捕食(在来種による)(52-4) 競争(外来種による)(56-1) 局所分布(61)

参考文献

Kobayashi, R., 2014. Column: Sado wrinkled frog: An alternative symbol for wildlife-friendly farming on Sado Island?, Usio, N. and T. Miyashita (eds), Social-ecological Restoration in Paddy-dominated Landscapes., pp. 115-121. Springer Japan, Tokyo.
 松井正文, 2016. 日本のカエル, 誠文堂新光社, 東京, 256pp.
 Sekiya, K., I. Miura, and M. Ogata, 2012. A new frog of the genus *Rugosa* from Sado Island, Japan (Anura, Ranidae). Zootaxa, 3575: 49-62.

執筆: 福山欣司(慶應義塾大学)・小林頼太(東京環境工科専門学校)

【汽水・淡水魚類】

■ 補遺資料掲載種一覧

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリ | |
|-----------|-----------|-----------------------------------|-----------------------------------|---------|--------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| ドジョウ | ドジョウ | <i>Misgurnus anguillicaudatus</i> | <i>Misgurnus anguillicaudatus</i> | DD* | NT |
| — | キタドジョウ | | <i>Misgurnus sp. (Clade A)</i> | — | DD |
| — | シノビドジョウ | | <i>Misgurnus sp. IR</i> | — | DD |
| — | ヒョウモンドジョウ | | <i>Misgurnus sp. OK</i> | — | DD |

※一部集団がキタドジョウ、シノビドジョウ、ヒョウモンドジョウとして分離されたため再評価

NT

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): DD(種分離による再評価)

コイ目ドジョウ科

【汽水・淡水魚類】

ドジョウ

Misgurnus anguillicaudatus (Cantor, 1842)

カテゴリー判定基準: b) d)

基礎情報

身体は延長し、体後部にかけてやや側偏する。尾柄長は尾柄高の 70%未満。5 対の口髭を持つ。オスの胸鰭基部に斧状の骨質盤が発達する。体色は一様に褐色から暗褐色で、腹部が明色であるが、変異に富む。尾鰭基部上部に 1 小黒斑がある場合が多い。

日本列島および近隣の東アジア地域に分布するが、分類学的に混乱しており、複数種を含むと見られる。日本産と中国大陸由来の個体はミトコンドリア DNA において異なる系統に属する。日本列島のほぼ全土に広く分布するが、北海道全域および南西諸島の一部に分布するものは国内外からの移殖に由来すると考えられている。主要な生息地である圃場など一時的な水域では、生息地と繁殖地の分断が進行している。

随時見直しの評価理由

本種はこれまで遺伝的に複数のグループを含み、実体や分布範囲などが不明とされてきたが、近年形態的、遺伝的特徴から、地理的なまとまりを持つ 4 グループに区別されることが明らかとなり、それぞれ個別の和名が提唱された。このため、評価対象を、複数グループを含んだ従来の「ドジョウ」から、新たに区分された 3 グループ(キタドジョウ、ヒョウモンドジョウ、シノビドジョウ)をのぞく新たな「ドジョウ」として再評価した。本種は水田地帯を中心に生息範囲の減少が指摘され、また国外外来種との競合、同種内国外系統との交雑による攪乱が懸念されており、こうした要因の進行により将来的に絶滅危惧に移行する状況にあると判断される。

存続を脅かす要因

湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 農薬汚染(32) 競争(外来種による)(56-1) 交雑(外来種による)(57-1) 交雑(在来種による)(57-2) その他(71)

参考文献

中島 淳・内山りゅう, 2017. 日本のドジョウ 形態・生態・文化と図鑑, 山と溪谷社, 東京, 224pp.

清水孝昭, 2014. ドジョウ: 資源利用と攪乱. 魚類学雑誌, 61 (1): 36-40.

清水孝昭・鈴木寿之・高木基裕・大迫尚晴, 2011. 沖縄島と西表島より得られたドジョウの形態的・遺伝的特徴. 日本生物地理学会会報, 66: 141-153.

執筆: 清水孝昭(愛媛県農林水産研究所水産研究センター)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): なし(種分離による評価)

コイ目ドジョウ科

【汽水・淡水魚類】

キタドジョウ

Misgurnus sp. (Clade A)

カテゴリー判定基準: a) b) d)

基礎情報

学名未決定種。体長は 120~210mm。体色は黒褐色~茶褐色。雄成魚の胸鰭基部の骨質盤の形態はシャモジ状。比較的眼径が小さく、頭頂から吻端にかけて直線状。ミトコンドリア DNA の部分塩基配列の特徴でも明確に他種と区別が可能。生態や生活史については不明な点が多いが、安定して生息が確認されているのは植生が豊富で水温が低い原生的な湿地環境に限られる。

現在のところ、北海道と本州東部(福井県以北)の限られた地域から知られる。サハリンからも遺伝的・形態的に似た集団の報告がある。国内において原生的な湿地環境は開発や水質汚濁によりかなり損なわれており、潜在的な生息地の多くが失われているものと考えられる。また人為的に導入された国内由来の外来種であるドジョウや国外外来種のカラドジョウとは、その形態的類似性から食物や生息環境などでの競合や交雑の可能性がある。

随時見直しの評価理由

これまで遺伝的に独自の集団と認識されていたが、2017年3月に新和名が提唱され、形態的特徴も示された。生息範囲の減少、近縁種との競合、交雑による攪乱が指摘されており、早急にレッドリストでの評価が必要と考えられる。一方で、これまでドジョウと混同されていた種でもあり、現時点でランクづけをするだけの科学的な情報が不足している。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 競争(外来種による)(56-1) 競争(在来種による)(56-2) 交雑(外来種による)(57-1) 交雑(在来種による)(57-2)

参考文献

Morishima, K., Y. Nakamura-Shiokawa, E. Bando, Y.J. Li, A. Borón, M.M.R. Khan and K. Arai, 2008. Cryptic clonal lineages and genetic diversity in the loach *Misgurnus anguillicaudatus* (Teleostei: Cobitidae) inferred from nuclear and mitochondrial DNA analyses. *Genetica*, 132: 159-171.

中島 淳・内山りゅう, 2017. 日本のドジョウ 形態・生態・文化と図鑑, 山と溪谷社, 東京, 224pp.

Okada, R., T. Inui, Y. Iguchi, T. Kitagawa, K. Takata and T. Kitagawa, 2017. Molecular and morphological analyses revealed a cryptic species of dojo loach *Misgurnus anguillicaudatus* (Cypriniformes: Cobitidae) in Japan. *Journal of Fish Biology*, 91: 989-996.

執筆: 中島 淳(福岡県保健環境研究所)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): なし(種分離による評価)

コイ目ドジョウ科

【汽水・淡水魚類】

シノビドジョウ

日本固有種

Misgurnus sp. IR

カテゴリー判定基準: a) b) c) d)

基礎情報

学名未決定種。体長 60~110mm。体色は茶褐色で、やや紫色みを帯びる。雄胸鰭基部の骨質盤は斧状。背鰭の第6軟条(最終軟条)が分枝しない。ミトコンドリア DNA の部分塩基配列の特徴でも明確に他種と区別が可能。生態や生活史については不明な点が多い。現在、安定して生息が確認されているのは植生が豊富で水質が良好なため池に限られる。

奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、西表島における分布記録があり、このうち奄美群島が自然分布域と考えられる。かつてはこれらの島のため池、水田、水路地帯に広く生息していたと考えられるが、現在確認されているのは徳之島(2ヶ所)、沖永良部島(1ヶ所)、西表島(1ヶ所)のみ。ただし西表島のものは由来は不明であるが人為移入集団と考えられる。奄美大島には現在中国大陸由来の外來ドジョウが生息しており、本種は確認されていない。喜界島では80年以上にわたり生息記録がない。

随時見直しの評価理由

これまで遺伝的に独自の集団と認識されていたが、2017年3月に新和名が提唱され、形態的特徴も示された。生息範囲の減少、近縁種の侵入と置き換わりが指摘されており、早急にレッドリストでの評価が必要と考えられる。一方で、これまでドジョウと混同されていた種でもあり、現時点でランクづけをするだけの科学的な情報が不足している。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 競争(外來種による)(56-1) 競争(在來種による)(56-2) 交雑(外來種による)(57-1) 交雑(在來種による)(57-2)

参考文献

鹿野雄一・中島 淳・水谷 宏・仲里裕子・仲里長浩・揖 善継・黄 亮亮・西田 伸・橋口康之, 2012. 西表島におけるドジョウの危機的生息状況と遺伝的特異性. 魚類学雑誌, 59: 37-43.

中島 淳・内山りゅう, 2017. 日本のドジョウ 形態・生態・文化と図鑑, 山と溪谷社, 東京, 224pp.

清水孝昭・鈴木寿之・高木基裕・大迫尚晴, 2011. 沖縄島と西表島より得られたドジョウの形態的・遺伝的特徴. 日本生物地理学会会報, 66: 141-153.

執筆: 中島 淳(福岡県保健環境研究所)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): なし(種分離による評価)

コイ目ドジョウ科

【汽水・淡水魚類】

ヒョウモンドジョウ

Misgurnus sp. OK

カテゴリー判定基準: a) b) c) d)

基礎情報

学名未決定種。体長は70~110mm。体色は茶褐色でやや金属光沢を呈し、体表に顕著な斑紋がある。口髭が長い。背鰭分枝軟条数は7以上。ミトコンドリア DNA の部分塩基配列の特徴でも明確に他種と区別が可能。生態や生活史については不明な点が多いが、安定して生息が確認されているのは植生が豊富なため池や水路に限られる。

沖縄本島、石垣島、与那国島、台湾における分布記録があり、このうち台湾と与那国島が自然分布域と考えられる。かつてはこれらの島の水田・水路地帯に広く分布していたと考えられるが、現在確認されているのは沖縄本島(2ヶ所)、与那国島(2ヶ所)のみ。ただし沖縄本島のものは由来は不明であるが人為移入集団と考えられる。石垣島では20年以上にわたり生息記録がない。

随時見直しの評価理由

これまで遺伝的に独自の集団と認識されていたが、2017年3月に新和名が提唱され、形態的特徴も示された。生息範囲の減少が指摘されており、早急にレッドリストでの評価が必要と考えられる。一方で、これまでドジョウと混同されていた種でもあり、現時点でランクづけをするだけの科学的な情報が不足している。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 競争(外來種による)(56-1) 競争(在來種による)(56-2) 交雑(外來種による)(57-1) 交雑(在來種による)(57-2)

参考文献

中島 淳・内山りゅう, 2017. 日本のドジョウ 形態・生態・文化と図鑑, 山と溪谷社, 東京, 224pp.

清水孝昭・鈴木寿之・高木基裕・大迫尚晴, 2011. 沖縄島と西表島より得られたドジョウの形態的・遺伝的特徴. 日本生物地理学会会報, 66: 141-153.

執筆: 中島 淳(福岡県保健環境研究所)

【昆虫類】

■ 補遺資料掲載種一覧

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリ | |
|---------------------|----------------------|--|--|---------|--------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| — | ヒサマツサイカブト | — | <i>Oryctes hisamatsui</i> | — | CR |
| ヨナクニウオレスブユ | ヨナクニウオレスブユ | <i>Simulium yonakuniense</i> | <i>Simulium yonakuniense</i> | EN | CR |
| — | タイワンモンシロチョウ対馬・朝鮮半島亜種 | — | <i>Pieris canidia kaolicola</i> | — | CR |
| オガサワラセセリ | オガサワラセセリ | <i>Parnara ogasawarensis</i> | <i>Parnara ogasawarensis</i> | VU | EN |
| ミヤマシロチョウ | ミヤマシロチョウ | <i>Aporia hippia japonica</i> | <i>Aporia hippia japonica</i> | VU | EN |
| ヒメイチモンジセセリ | ヒメイチモンジセセリ | <i>Parnara bada</i> | <i>Parnara bada</i> | NT | VU |
| クモツマキチョウハナ岳・南アルプス亜種 | クモツマキチョウハナ岳・南アルプス亜種 | <i>Anthocharis cardamines hayashii</i> | <i>Anthocharis cardamines hayashii</i> | NT | VU |
| — | ツマジロウラジャノメ四国亜種 | — | <i>Lasiommata deidamia kampuzana</i> | — | VU |

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

コウチュウ目コガネムシ科

【昆虫類】

ヒサマツサイカブト

日本固有種

Oryctes hisamatsui Nagai, 2002

カテゴリー判定基準:A-2 B-1, 3 D

基礎情報

2002年に南大東島から記載された。これまでのところ北大東島からの記録はない。沖縄県の各所に侵入・定着したタイワンカブトより大型で体長は50mm前後で、雌雄とも頭の角がよく発達する。東南アジアに広く分布するグヌサイカブトに近縁とみなされ、幼虫はピロウヤシを利用しているものと推測される。

記載以来、現認されている標本はごくわずかで、ここ数年、生体は全く確認されていない。古くから開拓が進んでいた南大東島において細くベルト状に残された防風林で発生していたが、2000年頃に島外から侵入・定着したタイワンカブトの食害によって、本種の食樹と推定されるピロウが広い面積に渡って枯死しており、このことが本種を絶滅の危機に追いやった大きな原因である可能性が高い。島内に多数設置されているフェロモンを用いたタイワンカブトの駆除用トラップでも本種が混獲された記録はない。外来種のオオヒキガエルによる捕食も懸念される。

随時見直しの評価理由

南大東島のみから知られる。記載以来、追加の記録はごく僅かである上に、大型甲虫であるにも関わらず、ここ数年採集記録はおろか目撃すらされておらず、2017年6、7月に実施した現地調査でも生息が確認できなかった。すでに絶滅している可能性すら危惧される状態であり、早急な保全対策が必要である。最新の沖縄県のRDBでは絶滅危惧IA類(CR)に指定されている。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 圃場整備(15-2) 土地造成(23) 捕食(外来種による)(52-3) 競争(外来種による)(56-1) 局所分布(61)

参考文献

Nagai, S., 2002. A new species and a new record of the dynastid beetle from the Ryukyu Islands, Southwest Japan (Coleoptera, Scarabaeidae, Dynastinae). Jpn. J. syst. Ent., 8(1): 45-48.

佐々木健志, 2017. ヒサマツサイカブト, 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版(動物編) - レッドデータおきなわ, p. 360. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

田川陽一・佐藤 勝・永井信二, 2003. 採集されたヒサマツサイカブトムシ(?)。月刊むし, (384): 12-15.

執筆: 荒谷邦雄(九州大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):EN

ハエ目ブユ科

【昆虫類】

ヨナクニウォレスブユ

Simulium yonakuniense Tokunaga, 1972

カテゴリー判定基準:B-1,2,3

基礎情報

現在、既知の1水系に加えて、新たに別の1水系からも生息を確認した(小松, 未発表データ)。しかし、いずれもダム工事や外来魚の侵入などにより、生息状況は予断を許さない。近年の異常気象に伴う干ばつも脅威に成り得る。

既知産地の田原川は、途中に大きな堰が建設されているが、これより上流域は水流が緩やかな場所が多く、また水深の深い場所も多い。本種の幼虫の生息に必要な、水流のかなり強く、浅い瀬のような環境がほとんどないため、調査では全く生息を確認できなかった(小松, 未発表データ)。堰より下流100mほどの所に、長さ10m程度に渡り川幅が狭く水流の強いエリアがあり、この範囲でのみ数個体の幼虫を確認している。この水系は緩流部を中心に、人為的に放たれたグッピーが高密度で生息しており、明らかにこれが生息しない領域でしかブユの幼虫は確認できない。さらに、島南部にある別水系においても、新たに本種の生息を確認した(小松, 未発表データ)。ここは人の出入りが困難な立地のためかグッピーはまだ侵入しておらず、台風直後でなければ田原川よりも明らかに個体数は多い。ただし、ここでも本種の幼虫が確認されるのは、高さ20cmほどの段差から落ちた水流が岩を洗うような場所など、特に水深浅く、水流の特に強い箇所に限定される。干ばつによる水量の低下、グッピーの新たな侵入が当面の脅威と思われる。

随時見直しの評価理由

本種は与那国島に既知産地が存在するものの、近年の確実な生息情報が把握されていなかった。しかし、2015、2016年に行なわれた調査によって確実な生息地と生息状況が確認された。

調査の結果から、分布範囲が与那国島の2水系の極めて狭い範囲にのみ限られること、生息地への外来種(グッピー)の生息拡大や移入による生息範囲の減少が懸念されることから、早急なカテゴリー変更の必要があると判断し随時見直しを行なった。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 河川開発(13) 土地造成(23) ダム建設(25) 捕食(外来種による)(52-3) 自然災害(55)

執筆: 小松貴(九州大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

チョウ目シロチョウ科

【昆虫類】

台湾モンシロチョウ対馬・朝鮮半島亜種

Pieris canidia kaolicola Bryk, 1946

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

開張 50mm 内外。国内では対馬にのみ分布し、島内全域に産地が知られる。年 6 回程度発生。食餌植物はアブラナ科のタネツケバナ、イヌガラシ、ハナナズナなど。平地～低山地の樹林の林縁や溪流沿い、木漏れ日が差し込む林道や道路脇などで見られる。

かつては対馬各地に生息していたが、2000 年代前半から急激に数を減らし、現在では島内全域で確認することができず、現在では絶滅に近い状態が続いている。2012 年 4 月 23 日に豆豉で 1♀の記録が公式発表では対馬最後の記録と思われる(玉置, 2012)。また、同亜種と思われる個体が迷チョウとして壱岐や中国地方、九州北部沿岸部でわずかに記録されている。

随時見直しの評価理由

かつては対馬全域に広く分布しており、個体数も多かったが、シカやイノシシ等の害獣の影響による食草の野生アブラナ科の減少、下層植生の衰退に伴う乾燥化等の生息環境の変化などにより、近年激減したものと考えられ、現在ではほぼ絶滅に近い状態にある。

存続を脅かす要因 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

日本チョウ類保全協会(編), 2012. フィールドガイド日本のチョウ, 誠文堂新光社, 東京, 328pp.

玉置高志, 2012. 対馬で台湾モンシロチョウを採集(長崎県). めもてふ, (291): 3230.

矢後勝也・平井規央・神保宇嗣(編), 2016. 日本産チョウ類の衰亡と保護第7集, 日本鱗翅学会, 東京, 351pp.

執筆: 矢後勝也(東京大学総合研究博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):VU

チョウ目セセリチョウ科

【昆虫類】

オガサワラセセリ

日本固有種

Parnara ogasawarensis Matsumura, 1906

カテゴリー判定基準:C2b

基礎情報

レッドデータブック 2014(昆虫類)p. 344.を参照。

<https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/%E6%98%86%E8%99%AB%E9%A1%9E_342.pdf>

随時見直しの評価理由

外来植物の侵入や土地利用の変化により、食草オガサワラススキにおける規模の大きな群落の減少が各地で見られる。特にモクマオウやリュウキュウマツ、ギンネム、シマグワなどの外来植物によって、母島および属島のオガサワラススキ群落が縮小しており、中でも母島ではこの傾向が顕著である。また、母島では外来トカゲ・グリーンアノールによる捕食圧の影響が強く疑われる他、母島属島でもギンケハラボソコマユバチやカマキリのような外来昆虫が発生個体数に影響している可能性が考えられる。

存続を脅かす要因 捕食(外来種による)(52-3) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

小路嘉明・山岡万寿夫, 1979. 小笠原諸島蝶類生態調査報告(第6報). Crude, (18): 2-5.

矢後勝也・平井規央・神保宇嗣(編), 2016. 日本産チョウ類の衰亡と保護第7集, 日本鱗翅学会, 東京, 351pp.

執筆: 矢後勝也(東京大学総合研究博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): VU

チョウ目シロチョウ科

【昆虫類】

ミヤマシロチョウ

Aporia hippia japonica Matsumura, 1919

カテゴリー判定基準: B-2,3

基礎情報

レッドデータブック 2014(昆虫類) p. 330.を参照。

<https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/%E6%98%86%E8%99%AB%E9%A1%9E_328.pdf>

随時見直しの評価理由

生息環境の森林化や開発、採集圧に加えて、最近ではシカ食害等により成虫の吸蜜植物が著しく減少し、特に八ヶ岳連峰や浅間連山で激減している。楡形山ではここ 20 年近く記録がない。また、南アルプスでは北部の狭い地域でいくらか安定して生息しているものの、南部ではシカ食害等の影響の他に、道路拡張による乾燥化等の影響も出ているようで、減少傾向が見られる。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) スキー場(22) 土地造成(23) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

田下昌志・西尾規孝・丸山潔(編), 1999. 長野県産チョウ類動態図鑑, 文一総合出版, 東京, 291pp.

矢後勝也・平井規央・神保宇嗣(編), 2016. 日本産チョウ類の衰亡と保護第7集, 日本鱗翅学会, 東京, 351pp.

執筆者: 矢後勝也(東京大学総合研究博物館)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): NT

チョウ目セセリチョウ科

【昆虫類】

ヒメイチモンジセセリ

Parnara bada (Moore, 1878)

カテゴリー判定基準: B-2,3

基礎情報

レッドデータブック 2014(昆虫類) p. 437.を参照。

<https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/%E6%98%86%E8%99%AB%E9%A1%9E_435.pdf>

随時見直しの評価理由

発生地となっている水田の減少や農薬利用により各地で激減または消滅している。特に奄美諸島では近年の記録がなく、鹿児島県では絶滅した可能性が高い。そのため、一昨年出版された鹿児島県のレッドデータブック 2016 では、絶滅危惧 I 類にランクされている。また、沖縄県では沖縄本島と西表島にいくつか生息地が残されているものの、石垣島では減少傾向が見られる。

存続を脅かす要因

圃場整備(15-2) 草地開発(16) 土地造成(23) 農薬汚染(32)

参考文献

鹿児島県環境林務部自然保護課(編), 2016. 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物: 鹿児島県 RED DATA BOOK 2016 動物編, 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島, 401pp.

矢後勝也・平井規央・神保宇嗣(編), 2016. 日本産チョウ類の衰亡と保護第7集, 日本鱗翅学会, 東京, 351pp.

執筆者: 矢後勝也(東京大学総合研究博物館)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): NT

チョウ目シロチョウ科

【昆虫類】

クモマツマキチョウハヶ岳・南アルプス亜種

Anthocharis cardamines hayashii Fujioka, 1970

日本固有亜種

カテゴリー判定基準: A-2

基礎情報

レッドデータブック 2014(昆虫類) p. 428.を参照。

<https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/%E6%98%86%E8%99%AB%E9%A1%9E_426.pdf>

随時見直しの評価理由

本亜種の生息地である南アルプス、八ヶ岳のうち、南アルプスの産地ではある程度安定しているが、八ヶ岳の産地では崩壊地の森林化、緑化工事、卵時の採集圧により、以前よりも著しく減少している。

存続を脅かす要因

草地開発(16) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

田下昌志・西尾規孝・丸山潔(編), 1999. 長野県産チョウ類動態図鑑, 文一総合出版, 東京, 291pp.

矢後勝也・平井規央・神保宇嗣(編), 2016. 日本産チョウ類の衰亡と保護第7集, 日本鱗翅学会, 東京, 351pp.

執筆者: 矢後勝也(東京大学総合研究博物館)

ツマジロウラジャノメ四国亜種

Lasiommata deidamia kampuzana Y. Yazaki, 1981

カテゴリー判定基準:A-2

基礎情報

開張 50～55mm。本亜種は四国山脈の高地帯に生息し、一部で低標高の山嶺部の岩場なども知られる。年 1～2 回の発生。食餌植物はイネ科のヒメノガリヤスなど。山地の溪流沿いにある露岩地を緩やかに飛翔し、よく花を訪れる。♂は吸水行動も見られる。

四国山脈のおよそ 1,200m 以上の高地帯にて局地的に分布するが、標高 500m 前後の低山地でも発生する所がある。近年では落石防止や道路拡張の工事などによって天然の岩場環境が失われている他、植生の変化も一部で見られ、各地で減少している。

随時見直しの評価理由

徳島県では低標高地で発生個体数が減少し、10 年以上記録がなく、一宇村、西祖谷山村、木屋平村、東祖谷山村では絶滅の可能性が高い。温暖化による植生の変化や天敵の増加が考えられている。愛媛県では 2005 年頃より急速に激減し、東温市では絶滅、一部の生息地でも減少傾向にあるが、その一方で安定した産地もいくつか見られる。露岩地のコンクリート化や道路の改修工事、温暖化等により減少している。高知県では仁淀川町、大川村、津野町などで絶滅し、現在生息している地域でも安定した産地はない。減少要因として車道の拡張、生息地の荒廃、一部で採集圧が考えられている。

存続を脅かす要因 河川開発(13) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61) その他(71)

参考文献

猪又敏男 (編), 1986. 大図録日本の蝶, 竹書房, 東京, 499pp.

矢後勝也・平井規央・神保宇嗣 (編), 2016. 日本産チョウ類の衰亡と保護第 7 集, 日本鱗翅学会, 東京, 351pp.

矢田 脩 (編), 2007. 新訂原色昆虫大図鑑, 第 1 巻 (蝶・蛾篇), 北隆館, 東京, 707pp.

執筆者: 矢後勝也 (東京大学総合研究博物館)

【貝 類】

補遺資料掲載種一覧

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリー | |
|-------------|-----------------|-------------------------------------|---|------------------|--------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| — | ミガキヤマキサゴ | — | <i>Ogasawarana obtusa</i> | — | CR |
| — | イリオモテムシオイ | — | <i>Chamalycaeus</i> sp. | — | CR |
| — | アナンムシオイ | — | <i>Cipangocharax ananensis</i> | — | CR |
| — | ゴトウノブエガイ | — | <i>Nobuea</i> sp. | — | CR |
| — | ヘドクリイロカワザンショウ | — | <i>Angustassiminea</i> sp. A | — | CR |
| — | テンドハサケイロカワザンショウ | — | <i>Angustassiminea</i> sp. B | — | CR |
| — | ウフアガリイロカワザンショウ | — | <i>Angustassiminea</i> sp. C | — | CR |
| — | ナラオゴマオカチグサ | — | <i>Cavernacmella</i> sp. A | — | CR |
| — | コシキゴマオカチグサ | — | <i>Cavernacmella</i> sp. B | — | CR |
| — | ウフアガリゴマオカチグサ | — | <i>Cavernacmella</i> sp. C | — | CR |
| — | ミヤコオカチグサ | — | <i>Paludinellassiminea miyakoinularis</i> | — | CR |
| — | タマグスクオカチグサ | — | <i>Paludinellassiminea</i> sp. A | — | CR |
| — | ドナンオカチグサ | — | <i>Paludinellassiminea</i> sp. B | — | CR |
| — | アソブイトクビキレ | — | <i>Truncatella</i> sp. B | — | CR |
| — | ロウタキクビキレ | — | <i>Truncatella</i> sp. E | — | CR |
| カワネジガイ | カワネジガイ | <i>Camptoceras hirasei</i> | <i>Camptoceras hirasei</i> | CR+EN | CR |
| — | ダイトウオカモノアラガイ | — | <i>Succinea</i> sp. | — | CR |
| 沖縄島のオキシジミ | ダテオキシジミ | <i>Cyclina sinensis</i> | <i>Cyclina</i> sp. | LP | CR |
| — | ヨコヅナケボリ | — | <i>Borniopsis</i> sp. | — | CR |
| — | オカトリノコガイ | — | Marginellidae gen. & sp. | — | CR |
| — | サルダアツブタムシオイ | — | <i>Awalycaeus yanoshokoe</i> | — | EN |
| オガイ | オガイ | <i>Cantharus cecillei</i> | <i>Cantharus cecillei</i> | CR+EN | EN |
| — | オキナワテラマチベッコウ | — | <i>Bekkochlamys</i> sp. | — | EN |
| — | ダンジョンメクジ | — | <i>Meghimatium</i> sp. | — | EN |
| — | サンエンマイマイ | — | <i>Satsuma</i> sp. A | — | EN |
| ヒメエガイ | ヒメエガイ | <i>Mesocibota bistrigata</i> | <i>Mesocibota bistrigata</i> | CR+EN | EN |
| カワシンジュガイ | カワシンジュガイ | <i>Margaritifera laevis</i> | <i>Margaritifera laevis</i> | VU | EN |
| コガタカワシンジュガイ | コガタカワシンジュガイ | <i>Margaritifera togakushiensis</i> | <i>Margaritifera togakushiensis</i> | CR+EN | EN |
| — | ヨナグニシロベッコウ | — | Euconulidae gen. & sp. | — | EN |
| — | ヨナグニヤマトガイ | — | <i>Japonia</i> sp. | — | VU |
| ヨナクニゴマガイ | ヨナクニゴマガイ | <i>Diplommatina yonakunijimana</i> | <i>Diplommatina yonakunijimana</i> | NT ^{*1} | VU |

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリー | |
|-----------|--------------|---------------------------------|---------------------------------|------------------|--------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| — | カイグンボウクビキレ | — | <i>Truncatella</i> sp. F | — | VU |
| — | リュウキュウダカラ | — | <i>Cypraea luchuana</i> | — | VU |
| — | ベッコウマイマイ科の1種 | — | Helicarionidae gen. & sp. | — | VU |
| — | トナキマイマイ | — | <i>Satsuma</i> sp. B | — | VU |
| — | クチベニツキガイ | — | <i>Cadokia punctata</i> | — | VU |
| ミヤコゴマガイ | ミヤコゴマガイ | <i>Diplommatina immersidens</i> | <i>Diplommatina immersidens</i> | VU※ ² | NT |
| — | 伊豆諸島のタメモマイマイ | — | <i>Bradybaena phaeogramma</i> | — | LP |
| ワキシメゴマガイ | 削除 | <i>Diplommatina lateralis</i> | 削除 | CR+EN | 削除 |
| ウオズミゴマガイ | 削除 | <i>Diplommatina uozumii</i> | 削除 | NT | 削除 |

※1 ウオズミゴマガイは、ヨナグニゴマガイと同種と判断されたため統合して再評価

※2 ワキシメゴマガイは、ミヤコゴマガイと同種と判断されたため統合して再評価

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

アマオブネ型目ヤマキサゴ科

【貝類】

ミガキヤマキサゴ

日本固有種

Ogasawarana obtusa Chiba, Sasaki, Suzuki & Horikoshi, 2008

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

父島で数百年前の堆積物中から見つかった化石をタイプ標本として記載された。殻は本属としては低平で、殻径約 5mm、殻長 3mm 弱のそろばん玉型で周縁角はない。螺層は 3.5 層。殻表は平滑で、細かい成長線のみを持つ。

タイプ産地である父島では、小笠原諸島の貝類研究が始まる以前に絶滅したと考えられている。現生個体群は兄島に存在するが、生息地は局限されるうえ、外来種のネズミ類による捕食が確認されており、小笠原諸島の他の陸産貝類同様に減少傾向が続いている。

随時見直しの評価理由

2008 年に新生代化石をタイプとして新種記載された。化石種と見做されて未評価であったが、Chiba (2010)において兄島の現生個体群が記録されており、レッドリストの評価対象となりうる。同島の陸産貝類はネズミ類の捕食等により危機的状況にあることが知られており、本種についても早急な評価が必要と考えられるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 捕食(外来種による)(52-3) 局所分布(61)

参考文献

Chiba, S., 2010. Invasive rats alter assemblage characteristics of land snails in the Ogasawara Islands. *Biological Conservation*, 143: 1558–1563.

Chiba, S., T. Sasaki, H. Suzuki, and K. Horikoshi, 2008. Subfossil land snail fauna (Mollusca) of central Chichijima, Ogasawara Islands, with description of a new species. *Pacific Science*, 62: 137–145.

執筆者: 亀田勇一(国立科学博物館)・和田慎一郎(首都大学東京)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目ヤマタニシ科

【貝類】

イリオモテムシオイ

日本固有種

Chamalycaeus sp.

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻は微小で殻径約 2.8mm。沖縄島に生息するオキナワムシオイと比べ、やや大きい。平巻き状で約 3.5 階の螺層を有する。殻は白く、やや光沢をもち、殻全体に繊細な縦肋をもつが、初層 2 階と体層の殻口部付近 0.5 層は縦肋が不明瞭で微弱となる。螺層 3 階付近には、螺管形状が歪んで頸部と呼ばれるくびれが形成されると共に、長さ約 900 μ m、幅 150 μ m の縫合管が発達する。蓋は革質で肥厚しない。

西表島は非石灰岩地が多くを占めており、本種の生息する石灰岩地は全体面積 289km² に対して 8.2km² (2.8%) に留まる。既存産地は南部 2、北部 1 の計 3 ヶ所が知られ、その内、1 地点は 2017 年現在生息が確認されない。南部の生息地点は比較的開発の進行している区域にあたる。北部の生息場所は、観光客等の往来が頻繁なトレッキングポイントで、落葉の隙間に棲むため、踏みつけによる殺傷、生息場所攪乱も考えられる。

随時見直しの評価理由

沖縄県西表島の石灰岩地だけに生息する固有未記載種である。本種の生息する石灰岩地は島の全体面積 289km² に対して 8.2km² (2.8%) で、既存産地は南部 2、北部 1 の計 3 ヶ所のみであり、その内、1 地点は 2017 年現在生息が確認されない。南部の生息地点は比較的開発の進行している区域にあたる。生息範囲が局限し、減少傾向も明らかであるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 土地造成(23) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

黒住耐二, 2017. イリオモテムシオイ, 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版(動物編)ーレッドデータおきなわー, p. 485. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆者: 久保弘文(沖縄県水産海洋技術センター)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目ヤマタニシ科

【貝類】

アナムシオイ

日本固有種

Cipangocharax ananensis Yano, Tada & Matsuda, 2013

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻は殻径 3.6mm ほどの扁平な円錐形。螺管は丸く、殻口手前のくびれは弱い。殻口は内唇が内側に湾曲し歪んだハート型となる。内唇上端は体層に接する。蓋は石灰質で厚く、内面中央に乳頭状の小さな突起を持つ。

徳島県阿南市の石灰岩地 1 地域(約 2km 圏内)にのみ棲息が確認されている。個体数も少ないとされ、マニアの採集やそれともなう棲息環境攪乱が懸念されるほか、当該地域で開発行為が行われればたちどころに絶滅するおそれがある。

随時見直しの評価理由

2013 年に新種記載され、記載論文によれば狭い地域の石灰岩地固有で個体数も少ないとされる。第4次レッドリストにおいて未評価であったが、早急にレッドリストでの評価が必要と考えられるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 石灰開発(17) 土地造成(23) 捕獲・狩猟(41) 局所分布(61)

参考文献

Yano S., A. Tada and H. Matsuda, 2013. A new species of *Cipangocharax* (Caenogastropoda: Cyclophoridae: Alycaeinae) from Tokushima Prefecture, Japan. *Venus*, 71: 29–38.

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目ヤマタニシ科

【貝類】

ゴトウノブエガイ

日本固有種

Nobuea sp.

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻長約 3.5mm、殻径約 5.8 mm の陸産貝類で、殻は白色で螺塔が低く、体層に 118~160 本の縦肋を等間隔に並べる。殻口は円く、唇縁は肥厚しない。臍孔は広い。蓋は円く茶褐色で、石灰化しない。頭部-腹足は白色で、頭触角は針のように細長く、根元に小さな眼を持つ。*Nobuea kurodai* ニッポンノブエガイに似るが、後種は縦肋がより細かく、その数は 192~283 本と多いことで識別される。

生貝は長崎県五島列島某島の 1 ヶ所のみで確認されている。隣接する別の島からも幼貝とみられる微小な死殻 1 個が得られているが、棲息はいまだ確認されていない。

極めて狭い範囲に棲息が限定される。また 1 個体の寿命が長い(少なくとも 5 年以上)ことから少卵と考えられ、総個体数もごく少ないことは疑いがなく、恐らく数百個体以下しか棲息していないと推測される。

随時見直しの評価理由

「日本最稀少陸産貝類」として知られるニッポンノブエガイに近縁な未記載種で、2013 年 11 月に初めて発見された。それ以前に文献上に記録は一切なく、2017 年 8 月刊行の長崎県レッドリストで初めて形態や生息状況の詳細が報告された。生息範囲は著しく狭い範囲に局限され、個体数も少ないなど危機的状況にあるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 農薬汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

福田 宏・亀田勇一・川内野善治, 2017. ゴトウノブエガイ (新称), 長崎県自然環境課(編), 長崎県レッドリストの中間見直しについて, pp. 8-9. 長崎県自然環境課, 長崎.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目カワザンショウ科

【貝類】

ヘドクリイロカワザンショウ

日本固有種

Angustassiminea sp. A

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻長 3mm、殻径 1.7mm。殻は円錐形で、*Angustassiminea satumana* サツマクリイロカワザンショウに似るが著しく螺塔が高く、赤色半透明、光沢が強い。螺層の膨らみと縫合のくびれは弱く、輪郭は直線的。殻長に比して殻口が極端に小さい。縫合下に明瞭な螺溝を巡らす。臍孔は閉じる。蓋は種子形で革質、半透明な黄褐色。頭部-腹足は無色で、頭触角は左右とも低い隆起状の痕跡が残るのみ。眼胞は長く、先端に黒色斑を持つ。腹足は短く、全長が約 1.5mm しかない。

沖縄島国頭村辺戸岬の固有種。崖上(標高約 20m)の石灰岩露頭間乾燥地において、植物の根元の僅かに湿った砂礫間や岩盤の隙間に、ウスイロヘソカド、クビキレガイとともに棲む。周囲はかつてキカイキセルモドキ、ヘリトリケマイマイが多産していた場所である。

1ヶ所の極めて狭い範囲からのみ知られる。過去にはより広く分布していた可能性もあるが、文献記録は一切ない。沖縄島北部の海岸の断崖には、辺戸岬以外にも類似した環境は見られるものの、本種は確認されていない。

随時見直しの評価理由

未記載種で、1990年代に発見されたが、文献公表されたのは 2017年3月刊行の沖縄県レッドデータブック及び *Molluscan Diversity* 所載論文が初めてである。生息範囲が著しく狭い範囲に局限され、しかも観光地の中に個体群が存在するなど危機的状況にあるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

海岸開発(14) 草地開発(16) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 農薬汚染(32) 人の踏みつけ(51) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

福田 宏, 2017. ヘドクリイロカワザンショウ (新称), 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) — レッドデータおきなわ —, pp. 434-435. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・小澤宏之・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック — レッドデータおきなわ — 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—1. 与那国島. *Molluscan Diversity*, 5: 1-14.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目カワザンショウ科

【貝類】

ティンダハナタクリイロカワザンショウ

日本固有種

Angustassiminea sp. B

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻長 3.2mm、殻径 2mm。殻は円錐形で螺塔が高く、黄褐色～濃茶褐色、薄質半透明、光沢が強い。螺層はやや膨らみ、縫合は多少くびれる。縫合下に明瞭な螺溝を巡らす。臍孔は閉じる。蓋は種子形で革質、半透明な黄褐色。頭部-腹足は無色だが背面の一部は黒色となる。頭触角は左右とも低い隆起状の痕跡が残るのみ。眼胞は長く、先端に微細な三日月形の黒色斑を持つ。腹足は全長約 2mm。

与那国島祖納のティンダハナタの固有種。石灰岩の断崖(標高約 70 m)のクレバス内において、地下水が湧出して濡れた露頭の表層を匍匐し、陸産貝類とも淡水産貝類とも見なしうる。周囲の湧水中にはヨナグニカタヤマガイが見られ、乾燥した岩盤上にはドナンオカチグサが産する。

1ヶ所の極めて狭い範囲からのみ知られる。過去にはより広く分布していた可能性もあるが、文献記録は一切ない。島内には他に類似した環境がなく、ヨナグニカタヤマガイが産する場所でも本種は確認されていない。

随時見直しの評価理由

2015年1月に初めて発見された未記載種で、それ以前に文献上に記録は一切なく、2017年3月刊行の沖縄県レッドデータブック及び *Molluscan Diversity* 所載論文において初めて報告された。生息範囲が著しく狭い範囲に限られ、しかも観光地の中に個体群が存在するなど危機的状況にあるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

海岸開発(14) 草地開発(16) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 農薬汚染(32) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61) その他(71)

参考文献

福田 宏, 2017. ティンダハナタクリイロカワザンショウ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) — レッドデータおきなわ —, p. 435. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・小澤宏之・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック — レッドデータおきなわ — 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—1. 与那国島. *Molluscan Diversity*, 5: 1-14.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目カワザンショウ科

【貝類】

ウファガリクリイロカワザンショウ

日本固有種

Angustassiminea sp. C

カテゴリー判定基準: B-1, 2

基礎情報

殻長 2.8mm、殻径 1.9mm。殻は卵円錐形で、黄褐色～濃茶褐色、薄質半透明、光沢が強い。螺層はよく膨らみ、縫合は明瞭にくびれる。縫合下に明瞭な螺溝を巡らす。臍孔は僅かな隙間状に開く。蓋は種子形で革質、半透明な黄褐色。頭部-腹足は無色だが背面の一部は黒色となる。頭触角は左右とも低い隆起状の痕跡が残るのみ。眼胞は長く、先端より多少後方に三日月形の黒色斑を持つ。腹足は全長約 2mm。

南大東島大池の固有種。カルスト湖である大池のオヒルギ群落の辺縁で、水辺のヨシの根元に沈んだ枯葉や枯茎の間に棲息する。同所的にスクミリンゴガイとヒラマキミズマイマイ近似種が見られる。

1ヶ所の極めて狭い範囲からのみ知られる。これまで文献記録や博物館標本は一切ない。隣接する北大東島には他に類似した環境がない。他の島の淡水・汽水環境においても、本種は確認されていない。

随時見直しの評価理由

2015年11月に初めて発見された未記載種で、それ以前に文献上に記録は一切なく、2017年3月刊行の沖縄県レッドデータブック及び Molluscan Diversity 所載論文において初めて報告された。生息範囲が著しく狭い範囲に限定される。生息地は水質悪化やゴミ投棄などの汚染、外来種(ティラピアとスクミリンゴガイが既に確認されている)の侵入などによって危機的状況にあるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 圃場整備(15-2) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック ―レッドデータおきなわ― 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告―3. 北大東島・南大東島. Molluscan Diversity, 5: 21–32.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目カワザンショウ科

【貝類】

ナラオゴマオカチグサ

日本固有種

Cavernacmella sp. A

カテゴリー判定基準: B-1, 3

基礎情報

殻長約 2 mm、殻径約 1.5 mm。殻は卵円錐形で薄い硝子質、光沢が強く、半透明で無色。後成層の彫刻は弱い成長脈のみ。臍孔は広く明瞭。黄褐色で半月形の薄い蓋を持つ。*Cavernacmella yamamotonis* ヤマトゴマオカチグサに似るがやや大きく、螺層の膨らみがより強く、臍孔も広い。

長崎県五島列島中通島の南松浦郡新上五島町(旧奈良尾町)奈良尾郷の奈良尾神社社殿裏からのみ知られる。この神社の社叢辺縁において、数本の広葉樹根元に堆積した落葉下に棲息する。同所的にヒダリマキゴマガイ、ヒゴギセル、オカチョウジ、ヒメベッコウ、ハリマキビ、コシタカシタラ、フリーデルマイマイなどが見られる。

棲息地は周囲をコンクリートで囲まれた 10×2m ほどの範囲しかない。1990年代に神田正人氏によって発見され、発見当時は多産していたという。2012年2月に川内野善治氏が同地を調査した際は、蓋と乾燥した軟体の入った死殻1個体が見出されたため、その時点でも棲息していたことは疑いないが、2013年11月に調査した際は死殻も発見できなかった。

随時見直しの評価理由

未記載種で、1990年代に発見されたが、文献公表されたのは2017年8月刊行の長崎県レッドリストが初めてである。生息範囲が著しく狭い範囲に限られ、しかも住宅地の中に個体群が存在するなど危機的状況にあるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61) その他(71)

参考文献

福田 宏・亀田勇一・川内野善治, 2017. ナラオゴマオカチグサ(新称), 長崎県自然環境課(編), 長崎県レッドリストの中間見直しについて, p. 9. 長崎県自然環境課, 長崎.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目カワザンショウ科

【貝類】

コシキゴマオカチグサ

日本固有種

Cavernacmella sp. B

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻長約 2mm、殻径約 1.5mm。殻は卵円錐形、薄くガラス質で光沢が強く、半透明で無色。後成層の彫刻は弱い成長脈のみ。臍孔は広く明瞭。ヤマモトゴマオカチグサやナラオゴマオカチグサに似るがより螺塔が高く、縫合のくびれも強い。

鹿児島県薩摩川内市甌島列島(旧下甌村)下甌島瀬尾崎からのみ知られる。砂浜辺縁において斜面下の転石地で、潮間帯上部に折り重なった石を 50~60cm 程度掘り起こすと転石下面に附着している。同所的にはキントシイロカワザンショウが少数見られるのみで、周囲の海浜植物根元の礫間にはヘソカドガイ等が産する。本種が属す *Cavernacmella* ゴマオカチグサ属にはごく狭い範囲の固有種も複数知られるため、本種も瀬尾崎または甌島列島の固有種である可能性が高い。

棲息地は 100×3m ほどの範囲しかない。1997 年 4 月早瀬善正氏によって初めて発見された。現時点で他の産地は知られていない。

随時見直しの評価理由

未記載種で、1997 年に発見されたが、文献公表されたのは 2017 年 1 月刊行の日本近海産貝類図鑑第二版が初めてである。生息範囲は著しく狭い範囲に限られ、近年は現地の環境状態の変化によって個体群の存否も確認できていないため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

海岸開発(14) 水質汚濁(31) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

福田 宏・長谷川和範, 2017. カワザンショウガイ科, 奥谷喬司(編), 日本近海産貝類図鑑【第二版】, pp. 127-133 (pls 83-89), pp. 813-816. 東海大学出版部, 平塚.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目カワザンショウ科

【貝類】

ウファガリゴマオカチグサ

日本固有種

Cavernacmella sp. C

カテゴリー判定基準: B-1.3

基礎情報

殻長 1.7mm、殻径 1.4mm。殻は卵円錐形、厚質、光沢が強く無色半透明。螺層は膨らみ、縫合はややくびれる。殻表は弱い成長脈以外は平滑。殻口外唇は肥厚する。臍孔は狭く開く。蓋は種子形で革質、半透明、黄褐色。頭部-腹足(北大東島の地表の個体にに基づく)は無色半透明。頭触角は右側の痕跡のみで、眼胞は太短く、先端に三日月形の黒斑を持ち、眼は黒色で明瞭。

北大東島と南大東島の固有種。北大東島では長幕の石灰岩崖下林床の落葉間に見られる。南大東島でもバリバリ岩等では地表の石灰岩間で確認され、また地下の石灰岩洞窟内部では濡れた横壁の表面に見られる。

微小種のため 1990 年代以後に僅かな記録が散見されるのみであるが、人類入植以前はより広範囲に存在した可能性が高い。2015、2016 年の調査では、北大東島では長幕の 1ヶ所、南大東島では地表はバリバリ岩のみ、洞窟内の個体群も 1ヶ所のみで確認された。特に地表では強い衰退傾向にある。

随時見直しの評価理由

未記載種で、その存在自体は 1990 年代以前から知られていたが、形態や類縁関係等について詳細に報告されたのは 2017 年 3 月刊行の沖縄県レッドデータブック及び *Molluscan Diversity* 所載論文が初めてである。生息範囲は著しく狭い範囲に限られ、特に地表の個体群は最近 10 年間で激減しているため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 石灰開発(17) 洞窟の消失や環境悪化(18) 土地造成(23) 道路建設(24) 農薬汚染(32) 捕食(外来種による) (52-3) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

福田 宏, 2017. ウファガリクリイロカワザンショウ, 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版(動物編)ーレッドデータおきなわー, pp. 435-436. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第 2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. *Molluscan Diversity*, 5: 21-32.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目カワザンショウ科

【貝類】

ミヤコオカチグサ

日本固有種

Paludinellassiminea miyakoinularis (Minato, 1980)

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻長 6mm、殻径 4.8mm。殻は円錐形で螺塔が高く、薄く壊れ易い。殻表は黄褐色で光沢は鈍く半透明、成長脈以外は平滑。縫合が明瞭にくびれて階段状となる。殻口縁は薄い。臍孔は開き、螺状稜角はない。頭部-腹足の地色は灰白色半透明、頭触角はこの属としては太短く、先端は暗色となる。右側の雑搬溝の縁取りは前後とも明瞭。蓋は革質半透明、黄色、少旋型。

宮古島野原岳の固有種。内陸部森林内の日陰において、石灰岩露頭の隙間に棲息する。記載以来生貝が発見されず絶滅種と見なされてきたが、2014年2月、久保弘文氏によって生貝が初めて発見され、2016年6月にも平野尚浩氏によって同じ場所での個体群の維持が確認された。野原岳以外ではまったく確認されておらず、個体群は1ヶ所のみ存在する。そこでは個体数は少なくないが、棲息範囲は極めて狭い。

随時見直しの評価理由

種の存在自体は1990年代以前から知られていたが、生貝が初めて発見されたのは2014年で、形態や類縁関係等について詳細に報告されたのは2017年3月刊行の沖縄県レッドデータブックが初めてである。生息範囲は著しく狭い範囲に限られ、人里近くであることから土地造成等の影響による激滅・絶滅が危ぶまれるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 農薬汚染(32) 捕食(外来種による)(52-3) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

福田 宏・久保弘文・黒住耐二, 2017. ミヤコオカチグサ, 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版(動物編) - レッドデータおきなわ, pp. 438-439. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目カワザンショウ科

【貝類】

タマグスクオカチグサ

日本固有種

Paludinellassiminea sp. A

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻長 5.5mm、殻径 3.5mm。殻は螺塔が高く、縫合が明瞭にくびれて階段状となり、臍孔が広く開いてその周囲に螺状稜角を欠く点でミヤコオカチグサに酷似するが、より濃い橙色で、成熟個体では厚質堅固となる。頭部-腹足の地色は灰白色半透明から濃い黒色まで変異がある。頭触角は長く、暗色。雑搬溝の縁取りや蓋の形態はミヤコオカチグサと同様。

沖縄島南城市玉城(標高 170m)からのみ知られる。石灰岩の断崖(恐らく石灰洞窟の天井が崩落して生じた谷状の地形)の下部において、日陰の乾いた露頭表層の窪みに見られる。夏季(7月末)に谷の外部が酷暑に見舞われる状態においても気温が相対的に低く、かつ高温な空気塊が溜まっている場所に限られる。

2016年以前には全く存在が知られていなかった。同年7月に玉城産イトマンマイマイの死殻中から褪色した死殻1個が亀田勇一氏によって見出され、その特異な形態から未知の絶滅種の化石である可能性も考えられたが、同年11月の亀田氏による再調査で生貝14個体が確認された。生貝は約 $2 \times 2 \text{m} = 4 \text{m}^2$ という極端に狭い範囲からのみ知られる。過去には沖縄島南部の石灰岩地により広く分布していた可能性もあるが、現時点で文献記録も標本も全くないため未詳。

随時見直しの評価理由

2016年7月に初めて発見された未記載種で、それ以前に文献上に記録は一切なく、2017年3月刊行の沖縄県レッドデータブックにおいて初めて報告された。生息範囲は著しく狭い範囲に限定され、個体数も少ないため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 農薬汚染(32) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61) その他(71)

参考文献

福田 宏・亀田勇一, 2017. タマグスクオカチグサ(新称), 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版(動物編) - レッドデータおきなわ, pp. 439-440. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目カワザンショウ科

【貝類】

ドナンオカチグサ

日本固有種

Paludinellassiminea sp. B

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻長 5.2mm、殻径 3.5mm。殻は円錐形で螺塔が高く、薄質。殻表は淡橙色で光沢は鈍く半透明、成長脈以外は平滑。螺層は弱く膨らみ、縫合は多少くびれ、周縁は弱く角張る。殻口縁は薄い。臍孔は広く開き、螺状稜角は欠くか極めて弱い。頭部-腹足の地色は灰白色半透明、頭触角は長く、暗色。右側の雑搬溝の縁取りは前後とも著しく発達する。蓋は革質半透明、黄色、少旋型。臍孔が広く臍域を囲む螺状稜角を欠く点でミヤコオカチグサに似るが、螺層の膨らみがやや強く、頭触角も長い。

生貝は与那国島祖納のティンダハナタのみで知られる。同島田原水園産の死殻 1 個体(久保弘文氏採集、矢野重文氏所蔵)も本種の可能性があるが、同地では生貝は確認されていない。ティンダハナタでは石灰岩の断崖(標高約 25~70m)のクレバス周辺において、日陰の乾いた露頭表層の窪みに見られる。周囲の湧水で濡れた岩盤上にはティンダハナタクリイロカワザンショウ、湧水中にはヨナグニカタヤマガイが見られる。

1ヶ所の極めて狭い範囲からのみ知られる。2002年3月芳賀拓真氏によりティンダハナタで採集され、2009・2015年の調査でも同じ場所で確認された。過去にはより広く分布していた可能性もあるが、文献記録は一切ない。島内には他に類似した環境がなく、ヨナグニカタヤマガイが産する場所でも本種は確認されていない。海岸に近づくとウスイロヘソカドしか見られないため、本種の棲息範囲は島内でも著しく限定されることは疑いない。

随時見直しの評価理由

2015年1月に初めて種としての存在が認知された未記載種で、それ以前の文献上には近縁種と混同されたり、同定が保留されていた。2017年3月刊行の沖縄県レッドデータブック及び Molluscan Diversity 所載論文において初めて形態や類縁関係等の情報が詳細に報告された。生息範囲が著しく狭い範囲に限られ、しかも観光地の中に個体群が存在するなど危機的状況にあるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 農薬汚染(32) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61) その他(71)

参考文献

福田 宏・亀田勇一・久保弘文, 2017. ドナンオカチグサ, 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版(動物編) —レッドデータおきなわ—, p. 440. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・小澤宏之・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック —レッドデータおきなわ— 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—1. 与那国島, Molluscan Diversity, 5: 1-14.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目クビキレガイ科

【貝類】

アソブイトクビキレ

Truncatella sp. B

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻長 8mm、殻径 3mm。殻は細長い円筒形、淡紅色で厚く不透明、光沢が強い。体層に約 27 本、次体層に約 25 本の緩く彎曲した細い縦肋を狭い間隔で並べる。螺層は膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。殻口外唇は反転するが、外側に縦張肋状の肥厚はない。胎殻は明瞭な縦肋を持つ。蓋は石灰化する。クビキレガイに似るが際立って小さく、螺層の膨らみと縫合の縊れが目立ち、縦肋数も少ない。アマミクビキレはほぼ同じ大きさであるが、本種の方が縦肋数が多く、間隔も狭い。

久米島(仲村渠の具志川城跡西の海岸)、南大東島(西)からのみ知られる。クビキレガイやアマミクビキレが南西諸島の広範囲に分布するのに対し、本種は上記 2 島 2ヶ所しか記録がない。久米島では内湾に面した隆起珊瑚由来の石灰岩岩礁飛沫帯において、粗砂底の転石間にサツマクリイロカワザンショウ、ウスイロヘソカド、クビキレガイ、ハマシノミ属等と共に見られた。

南大東島は採集日不明の波部忠重標本(国立科学博物館所蔵 NSMT Mo52054)及び山本愛三標本(西宮市貝類館所蔵 NCG031405)しか過去の産出の証拠が現存せず、もともと産地は少なかったと推測される。近年は 2009 年 4 月に久米島で生貝が確認されたのみであり、極端に稀産で、現存個体群が 1 箇所しかない点はロウタキクビキレと同様である。

随時見直しの評価理由

2017年3月刊行の沖縄県レッドデータブック及び Molluscan Diversity 所載論文において初めて形態や生息状況の詳細が報告され、それ以前の文献記録は一切ない。現在生息が確認されているわずかな産地においても、生息範囲は著しく狭い範囲に限られるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 道路建設(24) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

福田 宏・亀田勇一, 2017. アソブイトクビキレ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ, pp. 442-443. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
 福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて. *Molluscan Diversity*, 5: 33-77.

執筆: 福田 宏 (岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): なし

新生腹足目クビキレガイ科

【貝類】

ロウタキクビキレ

Truncatella sp. E

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻長 4.8mm, 殻径 2.1mm。殻は短い円筒形、光沢を帯びたクリーム色(螺層中央に不明瞭で幅広い淡褐色帯を持つ個体が多い)で不透明、体層に約 21 本、次体層に約 24 本の強い縦肋を狭い間隔で密に並べ、縫合下は角張って階段状を成す。縦肋間は微細な螺脈を刻む。殻底の螺状稜角状の縞帯が著しく強く、縦肋がその上で板状に立ち、殻口の軸唇との間は深い偽臍孔状となる。外唇外側が強い縦張肋状に肥厚する。胎殻は明瞭な縦肋を持つ。蓋は石灰化する。

石垣島の椏海富野からのみ知られる。内湾奥の砂浜辺縁の礫地において、潮間帯上部の砂泥底に深く埋もれた転石間に、ブタハマチグサ、コデマリナギサノシタタリ等と共に見られる。同じ場所のより浅く埋もれた転石間からはクビキレガイに加え、アマミクビキレ、キザハシクビキレ、カイゲンボウクビキレも確認されている。

沖縄県産クビキレガイ科の他種はいずれも 2 つ以上の島で記録されているのに対し、本種は現時点で石垣島の 1 ヶ所でしか知られていない。福田・久保(2012)が本種をキザハシクビキレと誤同定して図示した以外には、文献記録や博物館標本は一切ない。いまだ石垣島の 1 ヶ所からしか知られておらず、そこでの棲息範囲も僅か十数 m 程度と著しく狭いため、稀少性の極めて高い種と考えられる。過去にはもっと広く分布していたものの存在が知られないままに大半が消滅した可能性もある。

随時見直しの評価理由

2017 年 3 月刊行の沖縄県レッドデータブック及び *Molluscan Diversity* 所載論文において初めて形態や生息状況の詳細が報告され、それ以前の文献記録は福田・久保(2012)を除き一切ない。現在生息が確認されているわずかな産地においても、生息範囲は著しく狭い範囲に限られるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

| | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|---------------|----------|----------|
| 海岸開発(14) | 土地造成(23) | 道路建設(24) | 水質汚濁(31) | 農薬汚染(32) | 捕獲・狩猟(41) | 遷移進行・植生変化(54) | 自然災害(55) | 局所分布(61) |
|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|---------------|----------|----------|

参考文献

福田 宏, 2017. ロウタキクビキレ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ, pp. 444-445. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
 福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて. *Molluscan Diversity*, 5: 33-77.
 福田 宏・久保弘文, 2012. キザハシクビキレガイ (新称), 日本ベントス学会 (編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, p. 55. 東海大学出版会, 秦野.

執筆: 福田 宏 (岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): CR+EN

異種目ヒラマキガイ科

【貝類】

カワネシガイ

日本固有種

Camptoceras hirasei Walker, 1919

カテゴリー判定基準: A-2 B-1,3

基礎情報

殻長約 10mm, 殻径約 2.5mm。殻はドリル刃状で前後に極端に細長く引き伸ばされ、左巻、茶褐色半透明で薄質。各螺層は直前の螺層から離れ、肩部は強く角張る。殻表は微細な成長脈をもつ。蓋を欠く。頭部・腹足は濃い紅色で、白色斑を散在する。

東京都、京都・大阪府、青森・山形・新潟・茨城・群馬・埼玉・愛知・石川・福井・滋賀・和歌山・兵庫・岡山・香川・徳島各県から不連続的に産出記録がある。低地の池沼や潟湖などの辺縁に生じた湿原や止水環境に棲息する。5~11 月は水中の植物の茎や落葉等の上を匍匐し、12~4 月は陸上に登って落葉や朽木など遮蔽物の下面に附着して陸産貝類のように過ごす。恐らく一年生で、前の年の秋までに孵化した幼貝が冬を越したのちに成熟し、初夏までに産卵して死亡する。

低地の池沼や溝渠の辺縁に生じる湿原環境に特異的な種であり、戦前は東京・名古屋・大阪といった平野部の大都市近郊から知られていた。高度経済成長期以後、これら都市部の急速な開発によって本来棲息していた場所の大半が失われ、2006 年以降で棲息が確認されているのは和歌山県岩出市、岡山県吉井川水系、同県和気郡和気町の県自然保護センター敷地内の僅か 3 ヶ所のみである。

| | |
|---|---|
| 随時見直しの評価理由 | |
| 従来はもっぱら淡水産貝類と見なされて来たがこれは一部誤りで、生活史の半分は水中、もう半分は陸上で過ごすことが 2016 年刊行の研究で判明した。1 年のうちに水中と陸地を行き来するため両者が連続的であることが個体群存続に必須であるが、護岸などによって両者が分断されたことが主要な減少要因であり、その結果、これまで考えられて来た以上に危機的状況にあることが明らかとなったため、随時見直しにおいて評価した。 | |
| 存続を脅かす要因 | 湖沼開発(12) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 草地開発(16) ゴルフ場(21) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61) |
| 参考文献 | |
| 阿部 司・福田 宏, 2010. 絶滅危惧種カワネジガイ (腹足綱: 有肺目: ヒラマキガイ科) の岡山県における新産地. <i>Molluscan Diversity</i> , 2: 37-41. 福田 宏・森 生枝, 2016. 岡山県自然保護センター敷地内の田尻大池で 21 年ぶりに確認された絶滅危惧種カワネジガイ (腹足綱: 有肺類: ヒラマキガイ科), ならびに同種の棲息環境と水陸両棲生活に関する考察. 岡山県自然保護センター研究報告, (23): 1-12. | |

執筆: 福田 宏 (岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): なし

異種目オカモノアラガイ科

【貝類】

ダイトウオカモノアラガイ

日本固有種

Succinea sp.

カテゴリー判定基準: A-2

| | |
|---|---|
| 基礎情報 | |
| 殻長 8mm、殻径 5.5mm ほどの長楕円形で薄質、縫合は比較的くびれる。殻口は卵形で非常に大きく、殻長の 8 割近くを占める。軸唇は直線的でごく僅かにねじれ、臍孔はない。殻皮は淡黄色で弱い光沢を持つ。殻表は弱い成長脈の他に、殻頂-殻底方向とそれにほぼ直交する 2 方向の微細かつ不規則な線を密に生じ、絹目状となる。 南大東島・北大東島でのみ確認されており、大東諸島固有種である可能性が高い。死殻は両島で比較的普通に確認でき、過去の記録でも普通とされているが、2015 年以降の調査で生貝が確認されたのは南大東島の海岸林など 2 地点に限られる。棲息地点・個体数の激減に加え、近年では他地域でヒメオカモノアラガイ等を駆逐しつつある外来種ケショウオカモノアラガイも島に移入されており、本種の存続は極めて危険な状態である。 | |
| 随時見直しの評価理由 | |
| 2017 年 3 月刊行の <i>Molluscan Diversity</i> 所載論文で初めて報告された大東諸島固有の未記載種。かつては島の各地で見られる普通種であったとされるが、現在では著しく減少しており、最近の調査では小規模な棲息地が点在するのみとなっている。同諸島ではニューギニアヤリガタリクウズムシ等の捕食者の侵入により陸産貝類が激減しており、侵入範囲が拡大すれば残された個体群も速やかに消滅する危機的な状況であるため、随時見直しにおいて評価した。 | |
| 存続を脅かす要因 | 森林伐採(11) 圃場整備(15-2) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 農薬汚染(32) 捕食(外来種による)(52-3) 自然災害(55) 競争(外来種による)(56-1) 局所分布(61) |
| 参考文献 | |
| 亀田勇一, 2017. ダイトウオカモノアラガイ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) - レッドデータおきなわ -, p. 513. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇. 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック - レッドデータおきなわ - 第 2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告-3. 北大東島・南大東島. <i>Molluscan Diversity</i> , 5: 21-32. | |

執筆: 亀田勇一 (国立科学博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): LP

ザルガイ目マルスダレガイ科

【貝類】

ダテオキシジミ*Cyclina* sp.

カテゴリー判定基準: B-1,2

| | |
|---|--|
| 基礎情報 | |
| 本種はオキシジミと比較して、殻が厚く、貝殻表面の放射肋が後縁部のみ明瞭で、殻中央および前縁部は微弱となり、布目状にならない個体が多い特徴がある。本種の塩基配列はすべて中国南部 clade に属し、別 clade に属すオキシジミとは別種と考えられる。 沖縄島の内湾域のみに分布し、うち中南部では 1990 年代に埋立てにより大幅に棲息地が縮小し、特に与那原湾奥、糸満市真栄里、うるま市川田等では棲息地が消滅した。羽地内海、沖縄市泡瀬湾奥等では小規模ながら個体群が生残するが、総じて減少傾向にある。 | |
| 随時見直しの評価理由 | |
| 2014 年の見直しで地域個体群「沖縄島のオキシジミ」として掲載されたが、2017 年 3 月刊行の沖縄県レッドデータブックで日本本土のオキシジミとは別種であり、大陸遺存の可能性について示唆された。生息範囲である沖縄島の内湾域は限定され、著しく生息環境が悪化しており、早急にレッドリストでの評価が必要と考えられるため、随時見直しにおいて評価した。 | |

| | |
|-----------------|---|
| 存続を脅かす要因 | 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) |
| 参考文献 | 久保弘文, 2017. ダテオキシジミ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ -, p. 646. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇. |

執筆: 久保弘文 (沖縄県水産海洋技術センター)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): なし

ザルガイ目ウロコガイ科

【貝類】

ヨコツナケボリ

日本固有種

Borniopsis sp.

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

本科中、大型で殻長幅 17mm、殻高 10mm。横長の亜三角形で、膨らみはやや弱い。殻頂はほぼ中央から、僅かに前寄りに位置する。殻表には細かな成長脈と明瞭な毛彫り状放射肋を刻み、淡褐色の殻皮を纏う。軟体部は乳白色で、活動時には貝殻外縁より、微細な乳頭状突起を散在させる外套膜の縁辺部が露出するが、大きく進展して殻を覆うことはない。斧足は幅広く、よく発達し、少なくとも殻長の1/2の長さまで伸長する。

川平湾における 2010 年以降 5 年間のモニタリングで、新鮮な死殻を含め毎年確認されているが、うち生体は 2 年間の計 3 個体が確認されたに過ぎない希少種である。生体はいずれも調査用大型ショベルによって数 10 cm 以下の砂床より掘出され、湾奥部の砂質干潟にやや深く埋在していると考えられる。本種群はコムシ類やホシムシ類等との共生関係をもつ種が多く、本種も何らかの共生関係の可能性が高いが、現時点では不明である。

随時見直しの評価理由

本種は 2017 年刊行の沖縄県レッドデータブックで初めて報告された未記載種である。沖縄県石垣島の川平湾湾奥部砂質干潟(約 10ha)のきわめて狭い範囲にしか知られておらず、当該生息地は 2017 年現在も赤土堆積、富栄養等による環境悪化が継続しているため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 局所分布(61)**参考文献**

久保弘文, 2017. ヨコツナケボリ (新称), 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ -, p. 550. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
矢代幸太郎・浄土真佐実・田中亮三・鉢嶺 亮・中村由行, 2014. 石垣島川平湾における赤土等の堆積状況と開発行爲の影響. 土木学会論文集 B 2 (海岸工学), 73(2): 1207-1212.

執筆: 久保弘文 (沖縄県水産海洋技術センター)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): なし

新生腹足目トリノコガイ科

【貝類】

オカトリノコガイ

日本固有種

Marginellidae gen. & sp.

カテゴリー判定基準: B-1.3

基礎情報

殻長約 5mm、殻径約 2.8mm。長卵形で殻表は極めて平滑で光沢が強い。殻色は灰色を帯びるものの全体的に不透明で、螺塔および殻底は白く、体層に広い濁緑灰色帯を有する。軸唇前方に明瞭な 4 つの襞をもち、上から 3 番目の襞が他より顕著に長大となる。外唇内側には歯状突起等は全くない。歯舌は幅 100 μ m に近い幅広い中歯のみで、歯尖は中央が最も大きく、左右にそれぞれ 7~8 個の小歯尖が並び、縁辺部から数えて 1 本目と 3 本目が強くなる。

既存産地は沖縄県石垣島川平湾のみ。トリノコガイ類は通常、亜潮間帯で深~深海に生息圏をもつが、本種は特異的に中潮線付近の干潮時には干出する岩盤下に見られる。干出時は岩盤の窪地に静止しているが、上げ潮時に水中へ没すると、活発に匍匐する。樹木に覆われ、かつ岩礫が堆積した自然海岸に限られ、微視的には、隠蔽された岩盤裏などに棲みついている。

随時見直しの評価理由

本科中、最も陸域に近い潮間帯中部に生息する種で、2017 年刊行の沖縄県レッドデータブックで初めて報告された。日本産既知種には該当なく、未記載種と考えられる。現在、石垣島川平湾のみで確認され、生息範囲が局限しているほか、当該生息地の環境悪化が進行しているため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 水質汚濁(31)**参考文献**

久保弘文, 2017. オカトリノコガイ (新称), 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ -, pp. 508-509. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
矢代幸太郎・浄土真佐実・田中亮三・鉢嶺 亮・中村 由行, 2014. 石垣島川平湾における赤土等の堆積状況と開発行爲の影響. 土木学会論文集 B 2 (海岸工学), 73(2): 1207-1212.

執筆: 久保弘文 (沖縄県水産海洋技術センター)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目ヤマタニシ科

【貝類】
日本固有種

サルダアツブタムシオイ

Awalycaeus yanoshokoe Yano & Matsuda, 2016

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

アツブタムシオイ属 *Awalycaeus* は、蓋が厚く石灰化され殻口内に引き込まれず、虫様管付近が括れないことを特徴とする。本種は、同属の3別種(アツブタムシオイ *Awalycaeus abei*、タダアツブタムシオイ *Awalycaeus akiratadai*、クマモトアツブタムシオイ *Awalycaeus shiosakimasahiroi*)と比べて著しく大きく(殻径 3.83 - 4.47mm)、本属最大の種である。殻口が次体層より離れ、遊離する個体が多いことも本種の大きな特徴である。

高知県日高村沖名の猿田洞より約 3km の地点と猿田洞周辺の2ヶ所に分布する(矢野, 2017)。この2ヶ所ともに生息範囲が非常に狭い(矢野, 2017)、局所分布である。いずれも石灰岩地の環境である。現時点で確認されている生貝は、2産地合わせても30個体である(矢野重文氏, 私信)。潜在的な生息個体数は、この10倍程度と仮定しても300個体であり、1000個体に満たないと推測される。

随時見直しの評価理由

発見当初は約3万年前に推定される化石個体のみが知られていたが(川瀬ほか, 2012)、高知県日高村のごく限られた地域のみで現生個体が生存していることが明らかとなった(Yano et al., 2016)。著しい局所分布であることと稀産種であることより、人為的環境改変のほか、コレクション目的の乱獲も懸念される状況にある。生息範囲が局限しており、生息個体数も著しく少ないことから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

- 川瀬基弘・早瀬善正・安藤佑介・西岡祐一郎, 2012. 高知県猿田洞より産出したアツブタムシオイガイ属化石種サルダアツブタムシオイガイ(新称)を含む化石産貝類相. *Molluscan Diversity*, 3: 83-91.
 矢野重文, 2017. サルダアツブタムシオイガイ -- 新種記載後の反響と保護対策について. *まいご*, (24): 20-21.
 Yano, S., H. Matsuda, K. Nishi, M. Kawase, and Y. Hayase, 2016. Two new species of *Awalycaeus* (Caenogastropoda: Cyclophoridae: Alycaeinae) from Kochi and Kumamoto Prefectures, Japan. *Venus*, 74: 51-59.

執筆: 早瀬善正(株式会社東海アクアノーツ)、協力: 矢野重文(日本貝類学会評議員)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): CR+EN

新生腹足目エソバイ科

【貝類】

オガイ

Cantharus cecillei (Philippi, 1844)

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻長 40mm、殻径 20mm。殻は太い紡錘形で硬質堅固、殻表の地色は白色で茶褐色斑を散在するが、生時はオリブ色の厚い毛羽立った殻皮で覆われる。縦肋は太く強靱で、肩部で鈍く角張り、間隔は広い。縦肋の上に細く明瞭な螺脈が乗る。蓋は革質で厚い。

房総半島/富山湾以南、九州までと、朝鮮半島、中国沿岸に分布する。国内では三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海など大規模な内湾において、潮間帯下部~潮下帯の岩礁または礫混じりの砂泥底から知られる。温帯系種で、南西諸島には産しない。韓国西岸では現在も比較的普通に見られる。

1990年代以降各地で激減または消滅が伝えられ、三河湾では生貝は再発見されていない。瀬戸内海でも極端に稀産となっていたが、2000年代に入って愛媛県今治市や大分県国東市で採集され、また有明海湾口の熊本県天草市松島では潮間帯に個体群が現存することが判明していた。2013年に岡山・香川両県でヒメエガイが再発見された際、同種と随伴して出現する場所が複数見出され、ウネボラ、ナガゴマフホラダマシ等とともに独特の貝類群集を形成することが明らかになりつつある。現時点で兵庫県淡路島、岡山県倉敷市玉島黒崎、香川県高松市屋島、長崎県佐世保市などに小規模ながら個体群が存在する。

随時見直しの評価理由

環境省レッドリスト2017に新規追加されたウネボラ・ナガゴマフホラダマシや、今回本種とともに再検討されたヒメエガイ等と同一の貝類群集を形成することが判明した。それらの種と同様に生息範囲は局限され、減少傾向も明らかであるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 水質汚濁(31) 局所分布(61) その他(71)

参考文献

- 瀬尾友樹・Tanangonan, J., 2014. 2009~2013年における香川県沿岸の海産貝類相について. 近畿大学農学部紀要, (47): 87-124.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

異名目ベッコウマイマイ科

【貝類】

オキナワテラマチベッコウ

日本固有種

Bekkochlamys sp.

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻は螺塔が低く平らな形状で、成貝では殻径 16mm 程になる。濃茶褐色で殻表は光沢が強い。軟体は淡い黒色で、左右 1 対の外殻葉が殻を広く覆う。沖縄島北部のみに分布する、この地域のみ固有種である。国頭村(黒住・田中, 1986)、大宜味村(ネクマチヂ岳: 早瀬, 2017)、名護市(安和岳: 亀田勇一氏, 私信; 多野岳; 早瀬, 2017)の良好な天然林環境のみに分布が知られる。もともと分布域のきわめて狭い(沖縄島北部のおおよその面積 469km² 程度)範囲のみに生息する種である上に、生息域は、「やんばるの森」と呼ばれる良好な天然林環境が中心となる。

多くのベッコウマイマイ類は 1 世代の寿命が 1 年程度で短い場合が多いと考えられている。本種の場合も産卵数が多く(早瀬, 2017)、幼貝の時期には比較的個体数が多いと考えられるが、繁殖が可能な成熟個体(成貝)に達するまでに個体数は大きく減耗し、野外で確認される成貝の個体数は、1 地域の 1 回の調査で最大でも 10 個体に満たない。このことより、成貝に至る個体数は、どれほど大きく見積っても、沖縄島全域でも 1,000 個体に満たない。

随時見直しの評価理由

沖縄島北部の固有種であり、開発による森林の伐採や林床の乾燥化が本種の生息に悪影響を及ぼし、減少しているとされる(上島, 2017)。本種の生息確認地は沖縄島北部の良好な森林環境(やんばるの森)の数ヶ所が知られるのみで、確認例が殆どない稀産種であり成貝に至る個体数も僅かであると推定される(早瀬, 2017)。生息範囲が局限しており、減少傾向も明らかなことから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41)

参考文献

早瀬善正, 2017. 沖縄県大宜味村のオキナワテラマチベッコウ (ベッコウマイマイ科) の繁殖と成長. *Molluscan Diversity*, 5: 87-92.
 黒住耐二・田中 聡, 1986. オオムカデ属の一種によるベッコウマイマイ科陸産貝類の捕食. *沖縄生物学会誌*, 24: 67-68.
 上島 励, 2017. オキナワテラマチベッコウ (新称), 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄島の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) - レッドデータおきなわ-, p. 523. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 早瀬善正(株式会社東海アクアノーツ)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

異名目ナメクジ科

【貝類】

ダンジョナメクジ

日本固有種

Meghimatium sp.

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

体長約 55 mm、体幅約 10 mm の殻を欠くナメクジ状陸産貝類で、背面は淡橙色または灰白色で、左右の側面と正中線に淡褐色の縦条を前後に走らせるが、不明瞭な個体も多い。蹠面はベージュ色で、頭触角および第二触角は黒い。

Meghimatium bilineatum ナメクジや *Meghimatium fruhstorferi* ヤマナメクジに類似するが、背面の彩色が独特で、男女群島固有種と考えられる。男女群島の男島と女島で記録があるが、2015 年の調査で確認できたのは女島のみ。棲息は広葉樹林内に限られ、温暖化に伴う林床の乾燥化、植生変化などによって短期間で危機的状況に陥る恐れがある。

随時見直しの評価理由

2017 年 8 月刊行の長崎県レッドリスト中間見直し資料で初めて報告された、男女群島固有の未記載種。島内でも全域に生息するわけではないが、近年相次ぐ大型台風や豪雨の影響でがけ崩れが頻発していたり、逆に少雨で過剰に乾燥するなど自然災害に類する脅威に晒されるなど、棲息環境も悪化していることから、継続的な減少が懸念されるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61) その他(71)

参考文献

亀田勇一・福田 宏・川内野善治, 2017. ダンジョナメクジ (新称), 長崎県自然環境課 (編), 長崎県レッドリストの中間見直しについて, p.10. 長崎県自然環境課, 長崎.

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

真有節目ナンパンマイマイ科

【貝類】

サンエンマイマイ

日本固有種

Satsuma sp. A

カテゴリー判定基準:B-1,2

基礎情報

殻は殻長 12mm、殻径 15mm 程度で、低円錐形。殻表には微顆粒状の隆起が認められる。臍孔は小さいが、深く明瞭に開く。愛知県・静岡県に生息する未記載種。近似する同属の 2 未記載種(ニヨリサンエンマイマイ、シズオカマイマイ)とは、鞭状器の特徴で識別可能。サンエンマイマイの鞭状器先端は 2 分岐し、一方は瘤状、他方が鉤状に曲がるのが特徴。他の 2 種は 2 分岐しない。

愛知県東部～静岡県西部のみに分布する、この地域(三遠地域)の固有種である。生息地は、山地の自然林やそれに接するスギ植林である。アオキなどの常緑低木が部分的に茂るものの、日中は薄日が差し込み比較的明るい開放的な森林環境で確認される。常緑低木やそれに絡む草本の葉裏に付着していることが多い。1 回の調査では死殻が少数確認される程度で、生貝の確認がかなり稀な、分布域全体を通して見ても個体数密度が低い種である。

随時見直しの評価理由

本種はこれまでシメクチマイマイ *Satsuma ferruginea* の地方型とされていたが、愛知県東部～静岡県西部にかけてのきわめて狭い範囲の山地に生息する固有種であることが明らかとなった(早瀬ほか, 2016)。生息範囲が狭く、開発に伴う減少も懸念されることから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 農薬汚染(32) 自然災害(55)

参考文献

早瀬善正・波部忠重, 1993. シメクチマイマイの生殖器官の地方変異. ちりぼたん, 24: 36-38.

早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・矢橋 真・西 浩孝・川瀬基弘・石井健一郎・岩田明久・仲田彰男・藤原隆則・永尾和彦, 2016. 三岳山の陸産貝類相. かつばた (41): 1-16. かつばた, (41): 1-16.

増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸産水産貝類相. 東海大学自然史博物館研究報告, (3): 1-82.

執筆: 早瀬善正(株式会社東海アクアノーツ)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):CR+EN

フネガイ目フネガイ科

【貝類】

ヒメエガイ

Mesocibota bistrigata (Dunker, 1866)

カテゴリー判定基準:B-1,2

基礎情報

殻長約 30mm、殻高約 15mm。前後に引き伸ばされた長方形で、殻頂は多少前方に寄る。やや厚質で、殻表には約 30 本の低い放射肋を刻み、それらの肋は中央部が溝で分かたれ、また成長脈によって切られ顆粒状を呈する。腹縁は中央部で僅かに窪む。軟体は鮮やかな赤色。足糸を分泌して堅い基質に附着するが、自ら頻りに足糸を離して腹足類のように匍匐する。

日本、朝鮮半島、中国、ベトナム、ニューギニア、北オーストラリア、モザンビークなどインド～太平洋に広く分布するとされるが、国外産が日本産と同種か否かは今後詳細な検討を要する。国内では紀伊水道、瀬戸内海、福井～但馬沿岸、博多湾、有明海などで記録がある。韓国南西岸と中国黄海沿岸では今も健在とされている。

第二次世界大戦以前には西日本各地の内湾奥に棲息していたことは確実で、当時の標本が現存し、また現在も各地で古い死殻を頻りに目にするものの、生貝は 1974 年 3 月、有明海島原半島北岸の長崎県雲仙市神代で採集された個体を最後に長らく再発見されず、国内では絶滅した可能性も指摘されていた。2013 年、39 年ぶりに岡山県倉敷市と香川県高松市屋島で生貝が発見され、それ以後も岡山県備前市、笠岡市白石島、愛媛県今治市で産出が確認されており、徐々に復活傾向にあると考えられる。

随時見直しの評価理由

環境省レッドリスト 2017 に新規追加されたウネボラ、ナガゴマフホラダマシ(ゴマフホラダマシ)や、今回本種とともに再検討されたオガイ等と同一の貝類群集を形成することが判明した。それらの種と同様に生息範囲は局限され、依然として極めて稀少な種であるものの、従来よりは多少復活傾向にあると考えられるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 水質汚濁(31) 局所分布(61)

参考文献

福田 宏・瀬尾友樹, 2014. ヒメエガイの在来個体群が瀬戸内海に残存している可能性. まいご, (21): 25-28.

瀬尾友樹・Tanangonan, J., 2014. 2009～2013 年における香川県沿岸の海産貝類相について. 近畿大学農学部紀要, (47): 87-124.

内野 透, 2014. 岡山県水島灘におけるヒメエガイの再発見. ちりぼたん, 45: 36-39.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): VU

イシガイ目カワシンジュガイ科

【貝類】

カワシンジュガイ

Margaritifera laevis (Haas, 1910)

カテゴリー判定基準: A-2

基礎情報

殻は長卵形で、殻長は通常 15cm を超えない。前閉殻筋痕は丸い耳状である。幼生は円形で、殻長は 0.07mm である。幼生の腹縁には小さな歯が不規則に並ぶ。国内では北海道と本州に分布し、国外ではサハリンに分布する。夏季の水温が 20℃ を超えない、清冽な水が緩やかに流れる水域の礫～泥底に生息する。水温が 10℃ を超える頃に幼生が放出される。幼生はヤマメやアマゴの鰓に寄生して成長し、40～50 日後に殻長 0.3～0.6mm の稚貝となって脱落する。成長が良好であると短命で、成長が悪いと長寿となる。最大寿命は約 150 年である。

随時見直しの評価理由

第 4 次レッドリスト公表後の調査の結果、健全な個体群が多いとされてきた北海道においても河川工事による生息場所の破壊や宿主の減少などによって個体数が減少していることが明らかになってきた。また、ヌートリアやウチダザリガニによる捕食被害も確認された。さらに、タナゴ類の産卵母貝として採集圧も著しく、絶滅のおそれが増大しているため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) その他(71)

参考文献

Machida, Y. and Y.B. Akiyama, 2013. Impacts of invasive crayfish (*Pacifastacus leniusculus*) on endangered freshwater pearl mussels (*Margaritifera laevis* and *M. togakushiensis*) in Japan. *Hydrobiologia*, 720: 145–151.

内藤順一, 2016. 広島県におけるヌートリアによる淡水二枚貝への加害例. *比婆科学*, 257: 13–21.

執筆: 近藤高貴(大阪教育大学名誉教授)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): CR+EN

イシガイ目カワシンジュガイ科

【貝類】

コガタカワシンジュガイ

Margaritifera togakushiensis Kondo & Kobayashi, 2005

カテゴリー判定基準: A-2

基礎情報

殻は長卵形で、殻長は通常 10cm を超えない。前閉殻筋痕は尖った耳状である。幼生は円形で、殻長は 0.07mm である。幼生の腹縁には小さな歯が不規則に並ぶ。北海道と本州に分布し、夏期の水温が 20℃ を超えない、清冽な水が緩やかに流れる水域の礫～泥底に生息する。幼生はイワナの鰓に寄生して成長し、40～50 日後に殻長 0.3～0.6mm の稚貝となって脱落する。成長は遅く、寿命は約 60 年である。宿主が減少して世代交代が困難になっている個体群が多い。カワシンジュガイ類の幼生は、主としてサケ属とタイセイヨウサケ属を宿主としているが、本種だけはイワナ属を宿主としている。

随時見直しの評価理由

第 4 次レッドリスト公表後の調査の結果、生息状況のデータ等が蓄積されてきたので、随時見直しにおいて量的に評価した。カワシンジュガイと同様、生息環境の悪化、宿主の減少、外来種による捕食、採集圧が著しく、絶滅に対する危険度は徐々に高まっているため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) その他(71)

参考文献

Machida, Y. and Y.B. Akiyama, 2013. Impacts of invasive crayfish (*Pacifastacus leniusculus*) on endangered freshwater pearl mussels (*Margaritifera laevis* and *M. togakushiensis*) in Japan. *Hydrobiologia*, 720: 145–151.

竹内 基・柿野 亘・岡田あゆみ, 2016. カワシンジュガイ類研究の現状と課題. *青森自然誌研究*, 21: 109–129.

執筆: 近藤高貴(大阪教育大学名誉教授)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

異種目シタラ科

【貝類】

ヨナグニシロベッコウ

日本固有種

Euconulidae gen. & sp.

カテゴリー判定基準: B-1,2 D

基礎情報

殻は螺塔がほぼ平らな円盤状、殻径約 4.5mm、白色半透明、殻表は平滑で光沢がある。与那国島の固有種である。森林の林床に石灰岩礫が積み重なるように堆積する場所に生息する。地中に埋没する石灰岩礫の隙間の空間に生息する、半地下棲種である。2015 年 1 月の改訂・沖縄県レッドデータブックの調査では、与那国島の 2 地点でしか確認されておらず、最も多数の死殻と少数の生貝が確認されたのは、田原川の上流域である。このほか、久部良岳の石灰岩礫の間のリターサンプルより、死殻が 1 個体のみ確認された。

現時点で確認されている生貝の個体数は数個体に過ぎない。半地下棲種ということを考慮しても、現状で推定できる生息個体数は 200 個体に満たないと考えられる。

随時見直しの評価理由

与那国島の固有種であり、国内には殻形状より混同する様な種が存在しない。2015 年 1 月に与那国島で行われた調査より、開発による森林伐採および林床の乾燥化のため、本種のわずかな生息確認地においても死殻が確認されるのみで生貝はほとんど確認できず、絶滅が危惧される状況にあることが判明した(久保ほか, 2017; 上島, 2017)。生息範囲が局限しており、減少傾向も明らかことから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24)

参考文献

久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・小澤宏之・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック ―レッドデータおきなわ― 第 2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告―1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 1-14.

上島 励, 2017. ヨナグニシロベッコウ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) ―レッドデータおきなわ―, pp. 526-527. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 早瀬善正(株式会社東海アクアノーツ)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

新生腹足目ヤマトシ科

【貝類】

ヨナグニヤマトガイ

日本固有種

Japonia sp.

カテゴリー判定基準: B-1,2 D

基礎情報

上島(2017)により和名が提唱され、同時期に久保ほか(2017)でも報告された未記載種である。殻は低円錐形で螺管は円く、縫合が深い。殻径 4mm 程度。蓋は薄く、革質で円く多旋型。赤褐色の殻皮が殻表を覆い、体層周縁には 2 列の殻皮毛を具える。成長脈に沿って僅かな殻の色彩の濃淡の差異が見られ、それが繰り返すので、ぼんやりとした縞模様が確認される個体もある。与那国島の固有種である。与那国島の海岸近くの林から山地まで広範囲の森林環境に分布している。黒住(2005)でシマヤマトガイ類似種とされていたのは本種のことである。

与那国島の島内に広く分布するが、殆ど場合は過去から累積した死殻が確認されるのみで、生貝は 1 地点で数個体確認される程度である。したがって、与那国島の森林環境には一様に広く分布するが、本種の生息個体数は著しく少ない。

随時見直しの評価理由

殻に淡い縞模様を有する国内の本属他種には確認されない特徴を有する与那国島固有種である。2015 年 1 月に与那国島で行われた調査より、開発による森林伐採および林床の乾燥化のため、減少傾向にあることが判明した(久保ほか, 2017)。死殻の確認状況より与那国島の森林環境に広く分布していたことは明らかであるが、生貝は限られた場所にごく僅かしか確認することができず、減少傾向も明らかことから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 海岸開発(14) 圃場整備(15-2) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55)

参考文献

久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・小澤宏之・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック ―レッドデータおきなわ― 第 2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告―1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 1-14.

黒住耐二, 2005. シマヤマトガイ類似種, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) ―レッドデータおきなわ―, pp. 352-353. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

上島 励, 2017. ヨナグニヤマトガイ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) ―レッドデータおきなわ―, p. 487. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 早瀬善正(株式会社東海アクアノーツ)

ヨナグニゴマガイ

日本固有種

Diplommatina yonakunijimana Pilsbry & Hirase, 1909

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻長 3.2~4mm、殻径 1.7~2mm。螺塔は高い円錐形。淡黄褐色で規則的な成長肋を持つが、緊線より前方では平滑となることもある。殻口は円形で軸歯は弱く、腔壁はやや短い。緊線から約 1 層成長して殻口を形成するとウオズミゴマガイ、さらに 1/4~3/4 層余分に成長して殻口を形成するとヨナグニゴマガイと名付けられた形態になる。

与那国島固有種。久部良岳~宇良部岳周辺の自然林林床に棲息する。かつては多産したとされるが、2015 年調査時には、自然林内にパッチ状に点在する湿った土壌や落葉下のみ生貝が確認された。リター採取によるソーティング調査でも散見される程度で、棲息実態は明らかに悪化していると考えられた。

随時見直しの評価理由

2017 年 3 月刊行の *Molluscan Diversity* 所載論文において、ヨナグニゴマガイとウオズミゴマガイが同種の種内変異であることが報告された。近年の過剰乾燥等で棲息環境が悪化し、ウオズミゴマガイを含めた上でも棲息地点や個体数は減少していることが報じられていることから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 圃場整備(15-2) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

亀田 勇一, 2017. ヨナグニゴマガイ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) —レッドデータおきなわ—, p. 582. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田 勇一・小澤宏之・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック —レッドデータおきなわ— 第 2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—1. 与那国島, *Molluscan Diversity*, 5: 1-14.

執筆: 亀田 勇一 (国立科学博物館)

カイグンボウクビキレ

Truncatella sp. F

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻長 5.3mm、殻径 2.3mm。殻は円筒形、淡紅色~象牙色で不透明、光沢を帯び、体層に約 19 本、次体層に約 20 本の強い縦肋を並べ、縫合下は階段状を成す。殻底の繃帯と軸唇の間は遊離せず偽臍孔状にならない。外唇外側が縦張肋状に肥厚する。沖縄県産クビキレガイ科貝類のうち、胎殻の表面は目立った彫刻がなく、また蓋が石灰化せず薄く半透明で、楕円形で扁平となる唯一の種である。

沖縄島(恩納村山田)、宮古島(平良荷川取成川・下崎)、伊良部島(サバ沖井戸前)、石垣島、北大東島(江崎港)、南大東島(海軍棒)から知られる。クビキレガイやアマミクビキレが南西諸島の広範囲に分布するのに対し、本種は上記 6 島 7 ヶ所でしか記録がない。内湾奥または外洋に面した海岸飛沫帯において、岩礁の窪みに溜まった粗砂底間や転石・落葉下に見られ、同所的にキザハシクビキレ、ブタハマチグサ、カドカドガイ類、ヒミツナメクジ等が産する。既知のどの産地も棲息範囲が僅か数m程度と著しく狭い。過去にはより広く分布していたものの大半が壊滅した可能性がある。

随時見直しの評価理由

2017 年 3 月刊行の沖縄県レッドデータブック及び *Molluscan Diversity* 所載論文において初めて形態や生息状況の詳細が報告され、それ以前の文献においてはヤマトクビキレなど別種と混同されて来た。現在生息が確認されているわずかな産地においても、生息範囲は著しく狭い範囲に限られるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 道路建設(24) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

福田 宏・亀田 勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて, *Molluscan Diversity*, 5: 33-77.
福田 宏・久保弘文, 2017. カイグンボウクビキレ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) —レッドデータおきなわ—, p. 502. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 福田 宏 (岡山大学大学院)

リュウキュウダカラ

Cypraea luchuana (Kuroda, 1960)

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

最大殻長約 20mm、貝殻は光沢が強く、卵球形。外唇内側に約 16 本の歯状突起、内唇内側に約 16 本の襞をもち、全体は灰青色で、背面中央部には灰褐色の小斑を散在させる。日本の固有種で沖縄県のみで生息する貝類であり、生物地理学的意義が非常に大きい。

沖縄島とその周辺離島、宮古島、石垣島、西表島に分布する。主に潮通しの良いリーフ内のアマモ場に生息し、海藻や海綿を伴った清浄な底質を好む。イシサンゴ性の岩塊下部や隙間に生息するほか、同所にドーム上の卵塊を産みつけ、それを保護する習性をもつ。沖縄島南部、宮古島西部、石垣島南部では埋立てによる直接的な生息場所の消失等で生息数が減少しており、収集目的により、ネットオークションでやり取りされ、販売目的の乱獲も否定できない。宮古島、石垣島、西表島では沖縄島と比べ棲息範囲も狭く、特に石垣島、西表島は個体数も非常に少ない。

随時見直しの評価理由

海産貝類では数少ない沖縄島及び先島諸島の固有種で、埋立てによる生息場所の消失等により生息数が減少している。また本種はコレクターの興味の対象となる美しいタカラガイ類の一種で、近年、特に収集や販売目的での乱獲の影響も示唆されているため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41)

参考文献

久保弘文, 2017. リュウキュウダカラ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ, p. 504. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 久保弘文(沖縄県水産海洋技術センター)

ベッコウマイマイ科の1種

Helicarionidae gen. & sp.

カテゴリー判定基準: B-1,2 D

基礎情報

殻は螺塔が低く平らな形状、薄く半透明で光沢が強く淡黄褐色。殻径は 5mm 程度。軟体の外套葉は小さく殻の一部を覆い、腹足後端の尾角は長く明瞭。生殖器官は、交尾囊の柄部から囊部にかけて徐々に太くなるものの、ほぼ一様の太さで棍棒状。陰茎部は輸精管の結合部まで陰茎鞘で覆われ太く、枝豆状の形状。牽引筋は輸精管結合部付近の陰茎本体から陰茎鞘外へ延びる。陰茎鞘内に位置する陰茎には指状の付属肢が分岐し、陰茎本体の周囲には多数の指状突起が見られ、らせん状に配置している。

宮古島・伊良部島の固有種。林床の落葉下などに生息。宮古島の森林環境は極度に限られ、さらに開発の影響で著しい減少傾向にある。森林に生息する在来のベッコウマイマイ類は乾燥に著しく弱く、近年の激しい気象変動に伴う乾燥化も大きく影響し、本種の分布域は急速に狭められている。死殻は多く確認されるが、1回の調査で確認される生貝は 50 個体に満たない。

随時見直しの評価理由

宮古島・伊良部島のみで生息する固有種である。本種は近似種との比較においても明らかに異なる種とされ、開発による森林の伐採および林床の乾燥化が本種の生存に脅威である(上島, 2017)。宮古島・伊良部島の森林環境はごく限られた範囲にしか認められず、この点においても、本種は絶滅の危機に瀕していることは疑う余地がない。生息範囲が局限しており、減少傾向も明らかことから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 圃場整備(15-2) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55)

参考文献

湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. *Venus*, 39: 83-99.

上島 励, 2017. ベッコウマイマイ科の一種, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ, p. 609. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 早瀬善正(株式会社東海アクアーツ)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

異種目ナンバンマイマイ科

【貝類】

トナキマイマイ

日本固有種

Satsuma sp. B

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻は殻径 30mm 弱、螺塔はやや低く、周縁は丸い。臍孔は狭いが明瞭に開く。蜂蜜色の地に細い周縁色帯をめぐらす。シュリマイマイがもつ螺層上面と殻底の幅広い色帯を持たないか、持っても色が淡いため、殻色は明るい。

慶良間列島(少なくとも座間味・慶留間・阿嘉・屋嘉比・久場・渡嘉敷の 6 島)と渡名喜島に分布する。林縁附近の林床を主な棲息地とする地上棲種であるが、林に隣接する草地にも死殻がよく見られ、棲息場所として利用している可能性が高い。一部の島では普通であるが、過去に大規模な山焼きが行われた渡名喜島では特に分布が局限される。また、渡嘉敷島では近縁種ミヤコマイマイが移入されており、影響を受けている可能性がある。

随時見直しの評価理由

従来はシュリマイマイの個体群として扱われていたが、2017 年 3 月刊行の *Molluscan Diversity* 所載論文により独立種であることが報告された。棲息域は慶良間諸島・渡名喜島に限定され、特に渡名喜島では棲息地点が局限されるほか、慶良間諸島においてはシカの食害による林床の荒廃や近縁種の移入も確認されていることから、棲息状況が悪化していると考えられるため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 圃場整備(15-2) 草地開発(16) 土地造成(23) 道路建設(24) 競争(外来種による)(56-1) 交雑(外来種による)(57-1) 局所分布(61) その他(71)

参考文献

福田 宏・青柳 克・亀田勇一, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. *Molluscan Diversity*, 5: 117-144.

亀田勇一, 2017. シュリマイマイ類(腹足綱: ナンバンマイマイ科)の分布と国内移入状況. *Molluscan Diversity*, 5: 93-112.

亀田勇一, 2017. トナキマイマイ, 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版(動物編)ーレッドデータおきなわー, pp. 532-533. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

ツキガイ目ツキガイ科

【貝類】

クチベニツキガイ

Cadokia punctata (Linnaeus, 1758)

カテゴリー判定基準: A-2

基礎情報

殻長 10cm 程度に達する満月形の白い二枚貝類。貝殻は厚みがあり、全面に均等な浅く広い放射肋を有し、内面は周縁が鮮やかな紅色、内側は薄黄色を帯びる。主歯はよく発達し、靱帯は外在し、大きい。リーフ内の水深 1~20 m 付近までの潮通しの良い砂~細砂底に棲息し、与那国島比川、恩納村瀬良垣等では海底湧水が存在する場所で多産した事例がある。

奄美大島~先島諸島に分布し、1970 年頃のオールドコレクションには頻出するが、1990 年代前半には恩納村、沖縄市泡瀬、本部町瀬底島、名護湾、宮古島などで散見される程度となった。2000 年以降は古い死殻は見つかるが、新鮮な合弁個体は全く確認されなくなった。本種は浅海性の同科二枚貝類中、最も清浄なサンゴ礁性砂底域を生息場所としているため、海岸開発による生息場所の直接的消失、陸土流入および陸域からの富栄養による底質悪化が減少の一因と考えられる。

随時見直しの評価理由

奄美大島以南のサンゴ礁内において、海底湧水の影響を受ける砂底域に生息しているが、近年、陸土微粒子(特に赤土)の沈積や陸水環境の変化等により生息環境が悪化し、個体数の大幅な減少が指摘されているため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

海岸開発(14) 水質汚濁(31) その他(71)

参考文献

久保弘文, 2017. クチベニツキガイ, 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版(動物編)ーレッドデータおきなわー, p. 548. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 久保弘文(沖縄県水産海洋技術センター)

ミヤコゴマガイ

日本固有種

Diplommata immersidens Pilsbry & Hirase, 1904

カテゴリー判定基準:a) b)

基礎情報

殻長 3.5~4mm、殻径 1.7~2mm、太い紡錘形で縫合はやや浅い。螺塔はやや丸みのある円錐形。淡黄褐色で規則的な成長肋を持つ。殻口は円形で軸歯は弱く、腔壁はやや長い。緊線から約 1 層成長して殻口を形成するとミヤコゴマガイ、さらに 1/4~3/4 層余分に成長して殻口を形成するとワキシメゴマガイやコシボソゴマガイと名付けられた形態になる。

池間島、下地島を除く、宮古諸島固有種。自然林での調査では調査地点の 6 割で棲息が確認されているが、森林面積の減少により、棲息地は減少しつつある。林縁部に多産することもあり、小規模な開発でも個体群に大きな打撃を与える可能性がある。

随時見直しの評価理由

2017 年 3 月刊行の沖縄県レッドデータブックにおいて、ミヤコゴマガイとワキシメゴマガイは同種の種内変異であることが報告された。最近の宮古島市史編纂にあたって詳細な調査が行われ、従来知られていたよりも棲息地・個体数とも多いことが確認されていることから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 圃場整備(15-2) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 農業汚染(32) 捕食(外来種による)(52-3) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

亀田勇一, 2017. ミヤコゴマガイ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) - レッドデータおきなわ, p. 580. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

執筆: 亀田勇一 (国立科学博物館)

伊豆諸島のタメトモマイマイ

日本固有種

Bradybaena phaeogramma (Ancey, 1888)

カテゴリー判定基準:① ②

基礎情報

ミヤケチャイロマイマイとされた個体群の殻は比較的厚く、殻径 25mm 程度で、茶褐色の殻皮を有する。オナジマイマイモドキとされた個体群の殻はきわめて薄く、殻径 13mm 程度でより小形、赤褐色の殻皮を有する。

本種には、チャイロマイマイとされた個体群も該当し、分布域は奄美諸島、トカラ列島、屋久島、種子島、鹿児島県佐多岬などにも及ぶ。伊豆諸島個体群は、オナジマイマイモドキとされた個体群が八丈島と八丈小島に、ミヤケチャイロマイマイとされた個体群が三宅島、御蔵島、利島、新島、式根島、神津島、初島、手石島に分布。しかし、八丈島と初島は観光開発などの影響で、三宅島は雄山の噴火の影響で絶滅寸前もしくは、絶滅してしまった可能性がある。近年の伊豆諸島個体群は、八丈小島以外は、各島に生貝が少数確認される程度(河辺訓受氏, 私信)。九州以南個体群に減少傾向はないが、伊豆諸島のタメトモマイマイは、安定的な個体群維持が困難な状況になりつつある。

随時見直しの評価理由

2014 年 3 月刊行の *Journal of Molluscan Studies* 掲載論文で伊豆諸島の 2 種(ミヤケチャイロマイマイ、オナジマイマイモドキ)はタメトモマイマイ種群に包括され、これまで NT ランクであったミヤケチャイロマイマイは、九州以南個体群では減少傾向のないタメトモマイマイとして環境省レッドリスト 2017 より削除された。しかし、伊豆諸島のタメトモマイマイは生息範囲が局限しており、九州以南個体群とは個体群レベルでの遺伝的差異もあり、自然災害や島の観光開発なども伴い減少傾向も明らかことから、レッドリストでの評価が必要と考えられたため、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 草地開発(16) 土地造成(23) 道路建設(24) 農業汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55) 競争(外来種による)(56-1) 局所分布(61)

参考文献

波部忠重, 1977. 伊豆諸島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 77-82.

Hirano, T., Y. Kameda and S. Chiba, 2014. Phylogeny of the land snails *Bradybaena* and *Phaehelix* (Pulmonata: Bradybaenidae) in Japan. *Journal of Molluscan Studies*, 80: 177-183.

元陳力昇・河辺訓受・大久保統司・大原健司・大谷ジャーメンウィリアム・上島 励, 2017. 噴火後の三宅島の陸産貝類. *ちりぼたん* 47(1-4): 64-69.

執筆: 早瀬善正(株式会社東海アクアノーツ)、協力者: 河辺訓受(名古屋貝類談話会会長/日本貝類学会会員)

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): CR+EN

新生腹足目ゴマガイ科

【貝類】

ワキシメゴマガイ

Diplommatina lateralis Pilsbry & Hirase, 1904

削除理由

2017年3月刊行の沖縄県レッドデータブックにおいて、ワキシメゴマガイはミヤコゴマガイの種内変異であることが報告された。よって、ワキシメゴマガイはミヤコゴマガイのシノニムとしてレッドリストから削除し、ミヤコゴマガイについては新たに評価を行った。

参考文献

亀田勇一, 2017. ミヤコゴマガイ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) —レッドデータおきなわ—, p. 580. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2017): NT

新生腹足目ゴマガイ科

【貝類】

ウオズミゴマガイ

Diplommatina uozumii Minato, 1976

削除理由

2017年3月刊行の沖縄県レッドデータブックにおいて、ウオズミゴマガイはヨナグニゴマガイの種内変異であることが報告された。よって、ウオズミゴマガイはヨナグニゴマガイのシノニムとしてレッドリストから削除し、ヨナグニゴマガイについては新たに評価を行った。

参考文献

亀田勇一, 2017. ヨナグニゴマガイ, 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) —レッドデータおきなわ—, p. 582. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・小澤宏之・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック —レッドデータおきなわ— 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—1. 与那国島. *Molluscan Diversity*, 5: 1–14.

【その他無脊椎動物】

■ 補遺資料掲載種一覧

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリ | |
|-----------|---------------|-----------|---------------------------------|---------|--------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| — | オガサワラホソハマトビムシ | — | <i>Pyatakoveitia boninensis</i> | — | EN |
| — | イワキサリガニミミズ | — | <i>Cirrodrilus iwakiensis</i> | — | VU |
| — | キタホウネンエビ | — | <i>Drepanosurus uchidai</i> | — | DD |

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

節足動物門 軟甲綱節足動物門 甲殻綱 ヨコエビ目

【その他無脊椎動物】

オガサワラホソハマトビムシ

日本固有種

Pyatakovestia boninensis Morino & Miyamoto, 2015

カテゴリー判定基準: B-1, 3

基礎情報

体長 14~15mm と中型の陸生ヨコエビの仲間。体色は暗褐色。海岸に打ち上げられた海藻や森林の落ち葉の下等に生息し、驚くと跳びはねて逃げる。同じような名前の生物にトビムシ類がいるが、「トビムシ」は昆虫の仲間であり、「ハマトビムシ」は昆虫類よりもエビやダンゴムシ等に近い。ハマトビムシ科に属する日本固有種であり、2015年に新種記載された。小笠原諸島の父島、母島、弟島にのみ分布する。近縁のミナミホソハマトビムシは、本州から沖縄にかけて分布する。

小笠原諸島の母島から知られていたが、最近父島(渡邊, 2017)および弟島(未発表)にも分布することが明らかになった。しかし、生息適地を考慮に入れない場合でも生息地面積は 50 km² 以下である。外来種の陸生ヒモムシは母島、父島に侵入しており、その捕食により陸生ヨコエビ類は大きく個体数を減らしており、今後も減少は続くと思われている。

随時見直しの評価理由

本種は小笠原諸島に固有で、個体数は少なく、分布域も限られているが、1980年代初めに小笠原諸島に侵入した外来種の陸生ヒモムシの捕食により陸生ヨコエビ類の個体数の減少が著しいことが最近になって報告された。なかでも、オガサワラホソハマトビムシのように個体数が少なく分布域も狭い種への影響は大きい。外来の捕食性の陸生ヒモムシに対しては、有効な駆除方法は無いのが現状である。既侵入島での外来ヒモムシの分布拡大は今後も続くことが予想されているため、本種の大幅な減少が見込まれる。このため、本種についての早急な評価を行った。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 海岸開発(14) 捕食(外来種による)(52-3)

参考文献

森野浩, 1991. 小笠原のハマトビムシについて, 第2次小笠原諸島自然環境現況調査報告書, pp. 231-235. 東京都立大学, 東京.
 Morino, H. and H. Miyamoto, 2015. Redefinition of *Paciforchestia* Bousfield, 1982 and description of *Pyatakovestia* gen. nov. (Crustacea, Amphipoda, Talitridae). Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series A, 41: 105-121.
 Shinobe, S., S. Uchida, H. Mori, I. Okuchi and S. Chiba, 2017. Declining soil Crustacea in a world heritage site caused by land nemertean. Scientific Reports, 7: 1-8.
 渡邊昂平, 2017. 小笠原諸島父島におけるヨコエビ類について. 小笠原研究年報, 40: 59-72.

執筆: 富川 光(広島大学大学院)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

環形動物門 ヒル綱環形動物門 蛭綱(ヒル綱) ヒルミズ目

【その他無脊椎動物】

イワキザリガニミミズ

日本固有種

Cirrodrilus iwakiensis Ohtaka & Gelder, 2015

カテゴリー判定基準: B-1, 2

基礎情報

本州のニホンザリガニだけに共生するヒルミズ類の一種で、青森県の西部に分布する。宿主のニホンザリガニと同様、夏に高温にならず、水質が良好な河川上流部や湧水地等に生息する。体長は数 mm で、宿主の体表で一生を送るが、詳しい生態はよくわかっていない。日本では、北海道と本州北部に生息する在来のニホンザリガニに共生するヒルミズ類が 11 種知られていたが、本種は 2015 年に新たに追加された種類である。

八甲田山以西の津軽地方のニホンザリガニの体表に見られる。八甲田山、岩木山、および津軽半島の山地帯が本種の主要な分布域である。宿主のニホンザリガニの減少に伴って山間の小河川や湧水地に離散的に見られるようになっている。分布域ではアオモリザリガニミミズと共存する機会が多いが、密度はアオモリザリガニミミズより更に低い。ニホンザリガニに寄生する他のザリガニミミズ同様、絶滅危惧 II 類(VU)とした。

随時見直しの評価理由

1990年代から存在は知られていたが、2015年に新種記載されたヒルミズ類の一種。宿主のニホンザリガニの減少に伴って絶滅が危惧されることから、早急にレッドリストでの評価を行った。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 水質汚濁(31) 農業汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 競争(外来種による)(56-1) 局所分布(61)

参考文献

大高明史, 2010. 第V部 保全学, 第3章 群集生物保全, ザリガニの生物学(川井唯史・高畑雅一 編著), pp. 445-475. 北海道大学出版会, 札幌.
 Ohtaka, A. and S.R. Gelder, 2015. Description of a new species of Branchiobdellida (Annelida: Clitellata) and comparison with other *Cirrodrilus* Species in northern Honshu, Japan. Species Diversity, 20: 67-71.
 大高明史・向山満, 1998. 本州北部におけるヒルミズ類の分布について(予報). 青森自然誌研究, 3: 33-36.

執筆: 大高明史(弘前大学)

キタホウネンエビ

Drepanosurus uchidai (Kikuchi, 1957)

カテゴリー判定基準: b) c) d)

基礎情報

体長 15~19 mm の淡水性甲殻類。キタホウネンエビ科の日本固有種であり、北海道石狩と青森県下北半島の一部のみに分布し、海岸林の融雪プールに生息する。成体の出現は春の雪解けの時期に限られ、1 年の大部分を休眠卵の状態ですごす。体は細長い円筒形で、エビやカニのような堅い殻はもたない。腹部の 11 対の脚を波状に動かし腹面を上にして泳ぎながら、水中の植物プランクトン等をこしとって食べる。体色は淡褐色で、雌は卵のうおよび尾部が青色となり、よく目立つ。

分布域は北海道石狩と青森県下北半島の一部のみに限られるが、現在のところ個体群は維持されている。しかし、生息地の海岸林は開発の手が入りやすい場所であり、今後生息地の減少が危惧される。また、積雪量の減少も将来的な個体群の存続を危うくさせる要因である。

随時見直しの評価理由

本種の生息には雪解け水により生じた水溜り(融雪プール)が必要であるが、生息場所の海岸林が過去の各種開発行為により減少したことや、生息場所の積雪量が少なくなってきたことにより個体数の減少が危惧され、数年前の現地調査では、確認された融雪プールは数ヶ所のみであった。近年急激に減少しており、永続的な存続はかなり危うい状況であるため早急な評価を行ったが、現時点でランクづけをするだけの科学的な情報が不足している。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 局所分布(61)

参考文献

長縄秀俊, 2001. 現生の「大型異脚類」の分類. 陸水学雑誌, 62: 75-86.

大八木昭, 1996. キタホウネンエビ *Eubbranchipus uchidai* Kikuchi の新生息地と生態. 青森自然誌研究, 1: 25-30.

執筆者: 富川 光(広島大学大学院) 協力者: 大八木 昭(青森自然誌研究会 評議員)

【維管束植物】

■ 補遺資料掲載種一覧

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリ | |
|-----------|------------|-----------|--------------------------------|---------|--------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| — | オモトソウ | — | <i>Sciaphila sugimotoi</i> | — | CR |
| — | ヤクシマソウ | — | <i>Sciaphila yakushimensis</i> | — | CR |
| — | ヤクシマヤツシロラン | — | <i>Gastrodia albida</i> | — | CR |
| — | タブガワヤツシロラン | — | <i>Gastrodia uraiensis</i> | — | EN |

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

被子植物 ホンゴウソウ科

【維管束植物】

オモトソウ

Sciaphila sugimotoi

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

菌従属栄養性の多年草。2017年に新種記載され、石垣島のみから知られる。低山地のスダジイやイスノキが優占する湿り気のある常緑広葉樹林内に生育する。地上茎の高さは5~10cm。葉は鱗片状長さ約1.5mm。9月中旬から10月中旬に、長さ5~7cmの花序をつくり、10~35個の花を付ける。花被はピンクがかかった紫色から赤紫色で6裂する。雄花の花被の先端に6つの球形の突起(付属体)がつくことから類似種のホンゴウソウと区別される。

随時見直しの評価理由

既知の生育地は八重山諸島の石垣島のみで、産地・個体数とも限られており、現存する成熟個体数は合計50個体未満と絶滅が危惧される状況にあるためレッドリスト掲載の緊急性が高いと判断した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 土地造成(23)

参考文献

Suetsugu, K. and T. Nishioka, 2017. *Sciaphila sugimotoi* (Triuridaceae), a new mycoheterotrophic plant from Ishigaki Island, Japan. *Phytotaxa*, 314(2): 279-284.

執筆者: 日本植物分類学会

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

被子植物 ホンゴウソウ科

【維管束植物】

ヤクシマソウ

Sciaphila yakushimensis

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

菌従属栄養性の多年草。2016年に新種記載された屋久島固有種で、常緑広葉樹の自然林の林床に生育する。地上茎の高さは3~9cm。鱗片葉は鋭形で長さ約2mm。花序は総状、長さ2~5cm、6~15個の単性花をつけ、上部に雄花がつく。花期は8月~10月初旬。地上部全体が黒紫色である点、雄花の花糸が葯の高さを超えない点、雌花の花柱が棍棒状で多数の乳頭状突起をもつ点で、類似種のホンゴウソウと明確に区別できる。

随時見直しの評価理由

現存する成熟個体数は合計50個体未満である。2016年に新種記載され、産地・個体数とも限られており、絶滅が危惧される状況にあるため、レッドリスト新規掲載が急務であると判断した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 道路建設(24) ダム建設(25)

参考文献

Suetsugu, K., H. Tsukaya, and H. Ohashi, 2016. *Sciaphila yakushimensis* (Triuridaceae), a new mycoheterotrophic plant from Yakushima Island, Japan. *The Journal of Japanese Botany*, 91: 1-6.

執筆者: 日本植物分類学会

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

被子植物 ラン科

【維管束植物】

ヤクシマヤツシロラン

Gastrodia albida

カテゴリー判定基準: D

基礎情報

菌従属栄養性の多年草。台湾の固有種として 2011 年に新種記載されたが、2018 年に屋久島から国内新産報告がなされた。常緑広葉樹の自然林の林床に生育する。花はふつう 2~3 個、直立し鐘形で白みがかかった橙黄色、直径 4~7mm、外面にいぼ状突起がある。萼と花弁は長さにして 4/5 以上合着し、5 浅裂した花冠状。花序は長さ 1~5cm、果期には 10~30cm と伸び、蒴果は長さ 1~1.7cm の楕円形で帯白色。花期は 6 月。

随時見直しの評価理由

現存する成熟個体数は合計 50 個体未満である。2018 年に国内新産報告がなされ、我が国では屋久島でのみ確認されている。産地・個体数とも限られており、絶滅が危惧される状況にあるため、レッドリスト新規掲載が急務であると判断した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 道路建設(24) ダム建設(25)

参考文献

Hsu, T.-C. and C.-M. Kuo, 2011. *Gastrodia albida* (Orchidaceae), a new species from Taiwan. *Annales Botanici Fennici*, 48: 272-275.
Yahara, T. and M. Nakajima, 2018. A new record of *Gastrodia albida* T.C. Hsu & C. M. Kuo (Orchidaceae) from Yaku Island, Japan. *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*, in press.

執筆: 日本植物分類学会

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):なし

被子植物 ラン科

【維管束植物】

タブガワヤツシロラン

Gastrodia uraiensis

カテゴリー判定基準: D

基礎情報

菌従属栄養性の多年草。台湾の固有種として 2010 年に新種記載されが、2015 年に屋久島から国内新産報告がなされた。常緑広葉樹の自然林の林床に生育する。花は 1~5 個、直立し鐘形で暗茶色、わずかにうなずくか多少上向きに倒立して咲き、長さ約 13mm、径約 8mm、外面にわずかにいぼ状突起がある。萼片と花弁は長さにして約 2/3 まで合着し、5 浅裂した花冠状になる。唇弁は基部が橙黄色で中部が緑白色、頂部が暗赤色。花序は長さ約 1~4cm、果期には伸びて 30cm に達する。蒴果は長さ約 3cm の円筒形で深緑色。花期は 4 月。

随時見直しの評価理由

現存する成熟個体数は合計 50 個体未満である。2015 年に国内新産報告がなされ、我が国では屋久島でのみ確認されている。産地・個体数とも限られており、絶滅が危惧される状況にあるため、レッドリスト新規掲載が急務であると判断した。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 道路建設(24) ダム建設(25)

参考文献

Hsu, T.-C. and C.-M. Kuo, 2010. Supplements to the orchid flora of Taiwan (IV): Four additions to the genus *gastrodia*. *Taiwania*, 55: 243-248.
Suetsugu, K., 2015. First record of the mycoheterotrophic orchid *Gastrodia uraiensis* (Orchidaceae) from Yakushima Island, Japan. *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*, 6: 193-196.

執筆: 日本植物分類学会

【地衣類】

■補遺資料掲載種一覧

| 和名 | | 学名 | | RL カテゴリ | |
|-----------|--------|-----------------------------------|--------|---------|--------|
| RL2017(旧) | RL2018 | RL2017(旧) | RL2018 | RL2017 | RL2018 |
| フクレヘラゴケ | 削除 | <i>Thysanothecium scutellatum</i> | 削除 | NT | 削除 |

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2017):NT

チャシブゴケ目 ハナゴケ科

【地衣類】

フクレハラゴケ

Thysanothecium scutellatum

削除理由

本種は、最近の十数年の間に報告例が相次いでいる。特徴的な形態であり野外での識別が容易な種類であることから、過去の見落としではなく、西日本を中心に増加傾向にあるものと考えられる。

参考文献

宮崎県. 2016. 宮崎県版レッドデータブック 2015 年度版. <http://www.pref.miyazaki.lg.jp/shizen/kurashi/shizen/page00193.html>

Ohmura, Y., 2011. Notes on eight threatened species of lichens in Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B, 37: 57-61.

Ohmura, Y. et al., 2018. Increase of *Thysanothecium scutellatum* (Cladoniaceae, Ascomycota) in Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B, 44: 1-6.

■訂正履歴

| 訂正日 | ページ | 内容 |
|------------------|-----|-----------------|
| 平成 30 年 5 月 24 日 | 22 | ドジョウ 基礎情報の誤記を訂正 |

環境省レッドリスト 2018 補遺資料

平成 30 年 5 月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室